入元僧古源邵元の軌跡（上）

――嵩山少林寺首座から京都東福寺住持へ――

佐藤秀孝

はじめに

鎌倉末期から南北朝中期にかけて活躍した臨済宗聖一派の流れに属する臨済禅者のひとりに古源邵元（初名は契源、一二九五―一三六四）という人の存在が知られている。邵元は京都洛南に存する京都五山第四位の慧日山東福禅寺の第二五世となった禅者であり、その系統を示すならば、

破庵祖先―無準師範―東福円爾―双峰宗源―古源邵元

ということになる。この人は臨済宗破庵派の流れに属しており、東福寺開山の円爾（辨円・聖一国師、一二〇二―一二八〇）の晩年の法嗣である双峰宗源（双峰国師、一二六三―一三三五）に参じてその法を嗣いでおり、後には宗源の塔頭霊芝山万年桂昌庵ゆかりの桂昌門派の一員として自らもその東福寺に陞住しているわけである。円爾を派祖に仰ぐ聖一派は東福寺を中心に京都禅林に大門派を形成した系統であって、邵元もまたその法統に連なることで自らの立場を確立しているのであって、その面ではまさしく中世の五山禅僧の一角を担ってその身を全うした人であったといってよい。(1)

ところが、この人の足跡は単に聖一派ないし臨済一宗のみにとらわれず、また日本禅林の枠の中にも留まっていなかったところに大きな特徴が存している。実際のところ、邵元が日本禅宗史ないし日本仏教史の上で果たした功績としては、それほど際だったものが見い出せない。しかし、以下に述べるごとく邵元は壮年にして入元し、中国禅林の歴遊を果たしており、日元間における仏教・禅宗の交流の歴史上、きわめて注目すべき足跡を残している。

邵元の在元期間は実に二〇年以上にもわたっており、その間、当時としては珍しくも江南の禅宗叢林のみに留まることなく、かなりの歳月を北方中原の黄河流域の地に過ごしている。しかも、さらに注目すべきは邵元がこのとき北地（華

中・華北）に展開していた曹洞宗の禅者たちと深い道交を結んでいることであり、また彼ら曹洞禅者のためいくつかの碑文を撰している事実であろう。その一部は六五〇年余という歳月を隔てて現今にまで伝えられており、日中友好の歴史に輝かしい一頁を我々に垣間見させてくれている。日本僧の撰した碑銘が中国の地に現存していること自体きわめて稀なことであり、その面でも貴重な歴史資料ということになろう。

ここにいう北地の曹洞禅者とは、古く北宋末期の芙蓉道楷（定照禅師、一〇四三―一一一八）の高弟のひとり鹿門自覚（定慧禅師、？―一一一七）を遠源とし、『万松老人評唱天童覚和尚頌古従容庵録』（単に『従容録』）の評唱者として名高い金末元初の万松行秀（報恩老人、一一六六―一二四六）の流れに属する人々のことである。行秀の門流は元代以降に飛躍的に展開し、とくに法嗣である雪庭福裕（光宗正法禅師、一二〇三―一二七五）が菩提達磨の古道場である嵩山少林寺を復興して中興開山となってより、黄河流域から河北の諸禅院を席巻する勢いを有して隆盛していったのである。

このように邵元の足跡を詳細に辿ることは、そのまま日中両国間における仏教・禅宗の交渉、さらには元代における北地の曹洞宗の実態を知る上でも、かなり貴重な事実を今日に提供しているわけである。まさに邵元は在元中の事跡によって日中間の交流の歴史に特筆すべき存在となり得たのである。そこで以下、この邵元の稀有なる行実を辿ることによって、そのなした輝かしいあとかたを窺ってみることにしたい。もちろん、入元以前や帰国以後については、当然、邵元を取り巻く日本禅林の状況、とくに東福寺教団ないし聖一派の人々の動きも考慮に入れておかねばならないであろう。

なお、歴史的に禅僧の伝記史料や語録などは勅賜号や勅諡号で示されている例が多く、とくに南北朝時代はそれが顕著なことから、便宜上、禅者名の初出の際は勅賜号や勅諡号を有する人はなるべくこれを付記することにしたい。また南北朝時代に入ってからの年号としては、邵元がほぼ北朝方の勢力圏で活動していることから、原則として北朝年号を使用し、これに南朝年号と西暦を付記することにしたい。

邵元に関する研究文献

かつて古源邵元という一介の五山禅僧の事跡に着目する人などほとんど存しなかった。この人には特定の語録や詩文集のごときものも伝えられておらず、中世の五山文学において評価の基準となる資料に乏しかったというのがその主な理由にほかならない。

そんな邵元に対する評価が一変するのは、中国の河南・山東の地からこの人の撰した諸塔銘が発見され、日本に紹介されて以降のことである。それは邵元が示寂して実に五、六世

紀もの歳月を隔てた明治末期から大正時代にかけてのことであり、中国に残っていた邵元ゆかりの石碑が日本の識者の目に止まって調査報告がなされ、多くの人々の関心を呼ぶことになったのである。その後、邵元が撰した塔銘類について、幾人かの研究者がより具体的な報告や研究をなし、論文業績が随時に発表されてきたわけである。

いま、邵元に関する紹介報告や研究論文などを一通り挙げてみるなら、古く明治四二年（一九〇九）に桑原騰蔵氏が『歴史地理』第一五巻と第一六巻において「山東河南地方遊歴報告書」の報告をなして紹介したのに始まり、上村観光氏が大正八年（一九一九）に『禅林文芸史譚』（大鐙閣刊）に「支那に現存せる日本僧選文の古碑」（もと『禅宗』第一一九号に所収）と「再び支那に現存せる日本僧選文の古碑に就きて」の論考を残している。また常盤大定氏が昭和三年（一九二八）から翌年にかけてまとめた東洋協会学術調査部発行『東洋学報』第一七冊に「日本僧邵元の撰文せる嵩山少林寺の碑」の論考を残しており、同じく昭和二年に常盤大定・関野貞両氏の共編になる仏教史蹟研究会編『支那仏教史蹟並評解』などにも考証が存している。ついで昭和七年（一九三二）に鷲尾順敬氏が監修した『菩提達磨嵩山史蹟大観』にも邵元の碑文が写真で紹介されている。

さらに塚本善隆氏が昭和一一年（一九三六）八月の『日華仏教研究会年報』第一年に「元における東福寺廿五世邵元とその撰書の元碑」という論考を著しており、これは後に『塚本善隆著作集』第六巻の『日中仏教交渉史研究』に収められて一般に知られる。一方、中国でも豫博氏が『文物』一九七三年（昭和四八年）第六期（第二〇五号）において「日僧邵元在我国所撰碑文塔銘考略」をまとめたことから、中国の識者にもかなり注目されるようになったといってよい。

これら諸氏の研究成果を踏まえつつも、私なりに邵元という人の生涯の足跡を詳細に整理検討し、単に在元中の消息に留まらず、その全体像を通して邵元のすがたを浮き彫りにしてみたいというのが、あえて今回の拙稿をなさしめた理由にほかならない。

伝記史料について

ところで、邵元に関する伝記史料としてもっとも基本となるのは、『続群書類従』第九輯下（巻二三五）に載せられる「東福廿五世古傳和尚伝〈嗣双峰〉」であろう。しかしながら、この『続群書類従』に所収されるものは文字の誤写などが多く、そのまま依用するには問題がある。したがって、ここでは『続群書類従』が依拠した原本であって、東京大学史料編纂所に所蔵される『名僧行録』四に載る「東福廿五世古源和尚〈嗣双峰〉」を定本とすることにしたい。(2)

たとえば『続群書類従』本ではすでに表題が「古傳和尚伝」となっていたわけであるが、ここにいう「古傳」とは明らかに「古源」の誤りであって、『名僧行録』では「古源和尚(伝)」となっている。この点は『大日本史料』の「貞治三年十一月十一日」の項にも「東福廿五世古源和尚伝」として、また『東福寺誌』「貞治三年」（南朝の正平一九年）の箇所にも「古源和尚伝」としてほぼ同文を載せていることからも窺われる。[3] したがって、以下、すべて「古傳和尚伝」ではなく「古源和尚伝」として統一表記しておくことにしたい。

ところで、『名僧行録』では「伝」の字が付されていないが、これは名僧の伝記史料の集成であることから、後に単独に掲載する際に「古源和尚伝」と称したものであろう。おそらく「古源和尚伝」は邵元が示寂した直後に門人らによってまとめられたものであろうと推測されるが、その撰述年時はもちろん、撰者などについても何らの記載も存していない。しかし、その記述は邵元に関する貴重な足跡を伝えている点で、やはり第一等の史料であることは疑いない。

ただ、この「古源和尚伝」においては、後に示すがごとく曹洞宗宏智派や臨済宗夢窓派との関わりなどをことさら記さず、また在元中の北地曹洞禅者との道交についても何ら触れることがない。まして、在元中の記事にこの人が撰した中国禅僧の塔銘のことなどまったく述べられていない。「古源和尚伝」の撰者がそうした事実をまったく知らなかったのか、邵元がそうした自らの足跡をほとんど人に告げなかったためなのか、あるいはそうした関わりをあえて記そうとしない動きがあったのか、ことの真相については何ら定かでない。ともあれ、「古源和尚伝」は邵元と日本・中国の曹洞宗との関わりを一切記しておらず、東福寺派すなわち聖一派における位置づけのみに終結している感が強いのであって、この点は一応、考慮して検討してみる必要があろう。

一方、この「古源和尚伝」とは別に『国書総目録』第三巻には、

古源和尚行実〈こげんおしょうぎょうじつ〉＊国朝書目

という従来知られない史料についての記載が存している。[4] 実際に江戸時代に左京の藤原貞幹（字は子冬、号は蒙斎・無仏斎先生、一七三二―一七九七）が編纂した『国朝書目』巻中の「僧伝」には「古源和尚行実」の名が挙げられている。[5] 幸いにも禅文化研究所資料室編『無著道忠禅師撰述書目(1)〈龍華院所蔵之部〉』の「無著道忠禅師自筆写本〈禅学類〉」に「東福二十五古源和尚行実」の書目が存しており、臨済宗妙心寺派の無著道忠（一六五三―一七四四）が江戸中期に「古源和尚行実」を筆写していることが知られる。実際に花園大学の禅文化研究所に所蔵される『祖師行録』一冊には「東福二十五古源和尚行実」が収められて注目されるわけであるが、花園大

学の中尾良信氏の好意でその写本を禅文化研究所より取り寄せてみたところ、残念ながら内容は「古源和尚伝」と同一のものであって何ら目新しい箇所は存しなかったのである。おそらく道忠が筆写する段階で「行実」の二文字を付し、「古源和尚行実」と改めたものではないかと推測される。

ところで、「古源和尚伝」のほかに邵元の伝記を載せるものに江戸時代に編纂された燈史・僧伝が存している。すなわち、黄檗宗の高泉性激（大円広慧国師、一六三三―一六九五）が編した『扶桑禅林僧宝伝』巻五に「東福寺古源元禅師」の章があり、また臨済宗妙心寺派の卍元師蛮（独師、一六二六―一七一〇）が編した『延宝伝燈録』巻一二に「京兆東福古源邵元禅師」の章が、同じく師蛮が編した『本朝高僧伝』巻三〇に「京兆南禅寺沙門邵元伝」がそれぞれ収められている。(6) ただし、邵元は京都の南禅寺には陞住していないことから、『本朝高僧伝』が「京兆南禅寺沙門」として邵元を扱っているのは明らかな誤りとしなければならない。このほか、聖一派の伝記史料である『本朝僧宝伝』巻上や『扶桑五山記』五などにも邵元に関する簡略な記事が存している。(7)

そこで以下、「古源和尚伝」に基づき、燈史・僧伝を加味してその伝を考察するわけであるが、邵元伝の基本となる先の四種の史料を列記する場合、便宜上、それぞれつぎのごとく略称しておくことにしたい。

古源…「古源和尚伝」
扶桑…『扶桑禅林僧宝伝』
延宝…『延宝伝燈録』
本朝…『本朝高僧伝』

なお、「古源和尚伝」については諸本を整理して字句の異同を考慮し、もっとも妥当と見られるものを挙げておきたい。また邵元に関するその他の史料や諸文献の箇所については、その都度、個別に指摘することにしたい。

郷関と出家

古源…古源、諱邵元。越前州人、源氏。（中略）嘗号二如幻道人一、亦自称二物外子一。
扶桑…禅師、諱邵元、字古源。号二如幻道人一、亦自称二物外子一。出二於越前州源氏一。
延宝…京兆東福古源邵元禅師、姓源氏、越前州人。
本朝…釈邵元、号古源。俗姓源氏、越前人。（中略）元号二如如道人一、又称二物外子一。

邵元というのがこの人の法諱であり、その命名の由来こそ定かでないものの、どうやらこの法諱は邵元自身が後にその在元中に自発的に改名したものらしく、もともとは後に述べるごとく「契源」と称していたようである。(8)

いま、仮に邵元の法諱について若干の私見を述べるならば、邵元の「邵」とは中国の春秋時代に黄河の南、河南の地

に存した晋の国の地名であり、「元」とはいうまでもなく邵元が久しく過ごした蒙古帝国・元朝の国名にほかならない。これは推測ながら、いわば邵元はその在元中に河南の地でなした輝かしい業績を記念すべく、自らの名を正式に契源から邵元へと改めているのではなかろうか。したがって、厳密には契源と邵元の二つの法諱を使い分けて論じなければならないはずであろうが、ここでは便宜上、邵元という法諱で統一して扱っていくことにしたい。

ところで、すでに触れたごとく『続群書類従』本の「古傳和尚伝」によれば、邵元の道号を「古傳」と記しているが、これは明らかに『名僧行録』や『祖師行録』にいうごとく「古源」の誤りと見なければならない。このため『大日本史料』や『東福寺誌』においても明確に「古源和尚伝」と記されている。古源の「源」とは最初の法諱である契源の下字と同一であり、古仏の深源に契合する意味を持つものといえる。後に改めた邵元の法諱の「元」も源と同じく根本や本源を意味することから、いずれにせよ道号と法諱は深く関わっていることが知られよう。(9)

また『名僧行録』本の「古源和尚伝」によれば、邵元はかつて如幻道人と号したとされるが、『続群書類従』本の「古傳和尚伝」ではなぜか「如幼道人」となっている。如幼では意味をなさず、この点も『大日本史料』本や『東福寺誌』本さらに『扶桑禅林僧宝伝』がやはり如幻道人と伝えているから、明らかに『続群書類従』本の誤写と見てよい。如幻とは『大方広円覚修多羅了義経』すなわち『円覚経』にいう如幻三昧のことであり、世間の事相はすべて因縁によって生じたものであり、夢幻影泡のごとく仮に存するのみで実体がないと悟り、すべてにおいて執着しないことを意味している。(10)また『本朝高僧伝』においては「如如道人」と記されており、如如とは真如のことであるから、これでも意味は通るわけであるが、おそらく『本朝高僧伝』が如幻を如如と取り違えたものであろう。

また「古源和尚伝」をはじめ『扶桑禅林僧宝伝』や『本朝高僧伝』によれば、邵元は別に物外子とも称したとされる。物外とは世俗の外とか世間の事象の枠外ということであり、その物外の世界に身を逍遥させることを意味している。このことは後に触れるように邵元が唐代の馬祖下の南泉普願（王老師、七四八―八三四）の物外の宗風をこの上なく慕っていたことを示すものにほかならない。(11)邵元は如幻を生き方の指針とし、物外に身を横たえるありようを理想として物外子の別号を使用していたわけであろう。邵元の当時、道号として物外を用いた禅者としては、大応派の物外可什（真照大定禅師、一二八六―一三六三）がおり、邵元の示寂後では曹洞宗通幻派の物外性応（？―一四五八）の存在などが知られている。

「古源和尚伝」をはじめ諸史料はともに邵元を「越前州の人」と伝えていることから、邵元の出身地が越前（福井県）の地であったことが知られる。また、その俗姓に関しては『名僧行録』本の「古源和尚伝」が源氏とするのに対して、『続群書類従』本の「古傳和尚伝」は傳氏と記されている。この点も『扶桑禅林僧宝伝』『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』がともに源氏であったことを伝えていることから、やはり『続群書類従』本の誤写と見てよい。しかしながら、邵元が越前のいずれかの地の出身であったのか、また出身の源氏が具体的に如何なる氏族を指しているのかなどは定かでない。父親についてはその消息がまったく不明であるが、後に示すがごとく母親の方は氏族こそ不明ながら長寿を保った人であったらしく、邵元が在元中のかなり後半まで存命していたことが知られている。

また邵元の出生年時については、伝記史料で明確に記したものは存しないが、示寂年時と世寿との逆算を通して、鎌倉末期の永仁三年（一二九五）であったことが判明する。この点は『東福寺誌』の「永仁三年」の項においても、

古源邵元、越前に生る〔古源和尚伝〕。一説同五年。

と記されている。ただし、『東福寺誌』が如何なる史料に基づいて、いま一つの永仁五年（一二九七）の出生という説を述べているのかは定かでない。ともあれ、ここでは一応、「古源和尚伝」などに基づく永仁三年の出生説によって、以下、邵元の生涯における足跡を整理しておくことにしたい。

ところで、邵元が出家する以前の消息については、いずれの諸伝もまったく伝えておらず、この人が如何なる幼年期を過ごしたのかは定かでなく、出家するに至る過程なども明確でない。ただ、わずかに仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石（正覚心宗国師、一二七五―一三五一）の高弟である義堂周信（空華道人、一三二五―一三八八）が『義堂和尚語録』巻四「真賛」の「古源邵和尚」において、「自レ髫立レ志、及レ壮游方」と述べていることから、邵元の幼年期における消息の一端が知られる。「髫より志を立て」という表現であるが、髫とは髫歳・髫歯の意であって垂れ髪をした七・八歳の子供のことを指す[12]ことから、邵元が幼年にして自ら学仏道への志を立て、出家修道への道を選んだことが知られるわけである。おそらくはじめ郷里の村院などに投じて童行（童子行者）として仏門への第一歩を歩んでいるものと推測される。

宏智派の東明慧日への投帰

古源
扶桑
延宝
本朝

「古源和尚伝」をはじめ燈史・僧伝には何らの記載も存しないが、邵元は若くして越前から相模（神奈川県）の鎌倉へと赴き、はじめに元国からの来日僧であった曹洞宗宏智派の東明慧日（一二七二―一三四〇）の席下に投じてその直弟となったものらしく、慧日より「契源」という法諱を安名されているようである。

先に挙げた『義堂和尚語録』の「古源邵和尚」の真賛によれば「壮に及んで游方す」とあるから、これに従えば邵元は壮年に及んで諸方に遊歴したことになろう。壮年とは本来、三〇歳前後の年齢を示すものであるが、ここではおそらく単なる概算であって成長して後に遊方したことの意味にとってよいであろう。

東明慧日は明州（浙江省）定海県の人で、明州府城の天寧報恩光孝禅寺において宏智派の直翁可挙（徳挙・静慧禅師）に参じてその法を嗣いでおり、[13]『東明和尚語録』「明州白雲山宝慶禅寺語録」によれば、来日したのは延慶元年（一三〇八）のこととされている。[14] ときの執権であった北条貞時（法名は崇暁・崇演、一二七一―一三一一）の帰依を受けて、慧日は翌年には鎌倉の福源山禅興禅寺に出世開堂し、さらに延慶三年（一三一〇）には瑞鹿山円覚興聖禅寺の第一〇世に就任している。慧日は鎌倉禅林を中心に洞上の宗旨を挙揚し、以後、宏智派は五山派で唯一の曹洞系として独自の展開をなしていくのである。ちなみに慧日が来日した延慶元年の時点においては、邵元はいまだ一五歳前後でしかない。

ところで、その後、慧日は鎌倉禅林において剃度の門人（小師）に対して法諱として「円」または「契」の系字を授与しており、これが東明派の大きな特徴となっていることから、契源という法諱も慧日ゆかりの命名であったと見られるわけである。後のことながら『夢窓国師会下秉払法語』によれば、邵元は元国から帰国して京都天龍寺の夢窓疎石に招かれて秉払をなした際、「古源邵元」ではなく、それ以前の「古源契源」の名を使用している。[15]

慧日の法嗣としては、別源円旨（縦性、一二九四―一三六四）や月蓬円見（一二九五―一三七〇）・東白円曙（曙蔵主）および後に臨済宗大慧派に転じた中巌円月（中正子・仏種慧済禅師、一三〇〇―一三七五）らが「円」の系字を与えられており、また不聞契聞（万休叟、一三〇一―一三六八）をはじめ白石契詢・学拙契習・太虚契充（一三一三―一三八〇）らが「契」の系字を与えられている。当時、得度の小師に契の字を付与しているのはほぼ慧日に限られていることから、邵元の場合も慧日の席下でこの契の系字を与えられて契源と称していたものと推測されるわけである。古源契源という道号と法諱はまさに不聞契聞と好一対をなすかのごとき命名であり、あるいは道号と法諱に使われている「源」の字は邵元の出身である越前の源

氏の俗姓に因むものであったのかも知れない。

おそらく邵元はかなり若くして鎌倉に赴いているものと見られ、ときに来日して宏智派の曹洞宗旨を挙揚して注目されていた慧日に学んだのであろう。ちなみに慧日の席下には同じ越前出身の別源円旨なども投じているが、円旨は邵元より一歳年長で越前の合志氏（または平氏か）の出身とされ、宇多源氏の流れに属しており、郷里の仏種寺の竹庵圭（嗣承不詳）に投じ、延慶二年（一三〇九）に一六歳で剃髪受具してから鎌倉に赴いて円覚寺の慧日に随っている。[16] 邵元の場合も同じような経歴を経て越前から鎌倉に赴き、慧日の席下に投じているのではなかろうか。おそらく邵元は中国僧慧日を通して曹洞の門流への意識を培い、かつ元朝の江南禅林の実情についてもかなりの情報を得ることができたものと見られ、それがひいてはこの人を入元に掻き立てる大きな動機ともなっているものと推測される。

ところで邵元の出身地である越前の地には、いうまでもなく志比庄の吉祥山永平禅寺を開いた永平道元（一二〇〇―一二五三）を派祖とする曹洞宗真歇派の永平下の門流が存しており、ときあたかも越前大野の薦福山宝慶寺には後に永平寺中興五世となる義雲（一二五三―一三三三）があり、加賀（石川県）の東香山大乗寺には瑩山紹瑾（一二六四―一三二五）があってともに新たな接化を開始している。当然、邵元としても永平寺開山の道元のことや越前・加賀に展開しつつあった永平下の曹洞宗の存在は十分に承知していたものと見なければならない。

ちなみに積翠軒文庫旧蔵本の『関東諸老遺藁』（『五山文学新集』別巻二に所収）は、慧日に遅れて来日した東陵永璵（妙応光国慧海慈済禅師、一二八五―一五六三）をはじめ、不聞契聞さらに中巌円月ら宏智派ゆかりの禅者たちの作品が多く収められている点で特徴的な史料であるが、[17] その中に「恵日山主古源邵元書」という「頌軸序」が存しており、その中で邵元自らが、

一山国師、受二平元帥請一、辞二補陀席一、逾レ海越レ漠、遠来二本朝一、道行二関東一久矣。芝山上皇、嚮二其道風一、詔命屡下、迎請住二洛之南禅一。一時名卿鉅公、摳二衣室中一、四海俊衲奇士、輻二湊座下一。出二其門一者、皆鳳毛麟角也。乾明無惑老師、即其一也。余初東遊、相二見於福山一、一笑莫逆、相依者三載、後在二瑞鹿一、肩摩袂属者又三載矣。余遊二大唐一、一別之後、杳無二消息一者三十年矣。

と述べている。ここではじめに来日元僧である曹源派（一山派祖）の一山一寧（一二四七―一三一七）に関する記述が存し、ついで邵元が若くして一寧の法嗣である無惑良欽と関わりを持った消息が語られている。[18] すなわち、かつて邵元ははじめて東遊した際に、鎌倉の巨福山建長禅寺において三年間、良欽と莫逆の交わりを持ち、さらに後に円覚寺に

おいても三年間、同参であったことを伝えている。したがって、この表現によれば、邵元は先に三年、後にまた三年の、合わせて六年間を鎌倉禅林にて過ごしたことになろう。鎌倉禅林にて良欽と旧知の仲であった邵元は、その後、入元してより三〇年にわたって良欽と久しく相い見えることがなかったわけであるが、後に良欽が鎌倉長谷の乾明山万寿禅寺の住持となっていた際に、両者は再び対面することになったというのである。

ここでは東明慧日との関わりこそ明確には述べられていないものの、邵元がその参学のはじめに鎌倉禅林に学んだことが知られる。こうした宏智派や一山派などとの関わりが、後に『関東諸老遺藁』の中に邵元の作を収める因由となっているものと見られる。あるいは邵元ははじめ建長寺にて最晩年の一山一寧に学んでいるのかも知れず、ついで慧日について得度しているとも解されよう。[19]

ちなみに「月蓬見禅師塔銘」によれば、月蓬円見ははじめ東福寺の無為昭元（大智海禅師、一二四五―一三一一）に参じており、後に辞して鎌倉円覚寺の慧日の席下に投じている。また後に暦応三年（一三四〇）一〇月に東明慧日が示寂した際、蔵主の東白円曙（曙蔵主）は専使として上京し、東福寺の乾峰士曇に訃を告げている。[20] こうした事例からも、宏智派（東明派）と聖一派にはかなりの交流が存したことが知られるのであり、邵元が宏智派の慧日の下から東福寺の聖一派に転ずることも十分に推測可能なものであろう。

東福寺の南山士雲への参学

古源…初入レ京、隷二恵山雲南山一。雲器許充二侍司一。
扶桑…初謁二南山雲公一、雲一見器許、命侍二左右一。
延宝
本朝…初侍二南山雲公一。

「古源和尚伝」によれば、邵元ははじめ遊方して京都に上り、恵山すなわち慧日山東福寺において臨済宗聖一派の南山士雲（一二五四―一三三五）に参随したことになっている。この点は士雲の住持地こそ示さないが、『扶桑禅林僧宝伝』や『本朝高僧伝』においても同様に士雲への参学を伝えている。しかしながら、諸史料とも邵元が士雲について得度や受具をなしたとは記しておらず、邵元のそれまでの動静を故意に隠しているかのごとき印象する偲ばせる。

東福寺は京都洛南の東山の一隅に存しており、摂政の九条道家（法名は行慧、一一九三―一二五二）が円爾（聖一国師）を開山に請して開創した禅寺にほかならない。しかも、その後、代々にわたり円爾の門流（聖一派）のみが住持を独占する一流相承制を採用しているなど、五山派の中ではとりわけ固定的な門派を形成している。

士雲は遠江（静岡県）の藤原氏の出身とされ、東福寺開山の円爾について得度した後、かつて円爾と同門に当たる来日僧の無学祖元（子元・仏光国師・円満常照国師、一二二六―一二八六）に参学して省悟した人であり、後に筑前（福岡県）博多の万松山承天禅寺に出世開堂して円爾に嗣承香を炷いている。[21]

ちなみに士雲の伝記史料である「東福第十一世南山和尚行実」によれば、

延慶三年庚戌、五十七。相州貞時、奏二師行業精微一、住二東福一。（中略）恵日山、在二洛陽城東南一、最為二峭絶一。応長三年、退院上堂云、五歳耕開祖父田、不レ辞領被又蹄穿、如今力尽擬二伏櫪一、穏睡清風明月前。冬移二寿福一。

と記されていることから、士雲が北条貞時の推挙で東福寺第一一世として陞住したのは延慶三年（一三一〇）であったことが知られる。[22] 士雲には『南山和尚語録』一冊が内閣文庫（東京大学史料編纂所に複写本が存する）に伝えられており、近年に翻刻されて一般に知られているが、[23] その「南山和尚住城州恵日名山東福禅寺語録」には実際に「師於二延慶三年七月十一日一入レ寺」と明記されている。ちなみに応長元年（一三一一）一二月二六日には亡き東福寺開山円爾に対して聖一国師の諡号が下賜され、正和元年（一三一二）一〇月一七日には東福寺にて開山円爾の正当三十三回忌が厳修されているから、邵元も士雲の下でこうした諸行事に随喜しているはずである。

その後、士雲は応長三年すなわち正式には正和二年（一三一二）に東福寺を退住し、冬に鎌倉扇ヶ谷の亀谷山寿福金剛禅寺に遷住したとされているが、「退院上堂」にいうごとく東福寺での住持期間が五年間であったとすると、これは明らかに正和三年の誤りでなければならない。したがって、邵元は士雲が東福寺に住持していたこの数年間の時期にその席下に投じているものと推測される。

「古源和尚伝」と『扶桑禅林僧宝伝』によれば、士雲は席下に至った若き邵元を法器として見抜いて重んじ、侍者に充てて身辺に侍せしめている。侍者は常に住持に付き従ってその給仕や補佐をする職位であるから、士雲としては邵元をいつも身近に置いてこれを接化育成することに努めたのであろう。

「広智国師乾峰和尚行状」によれば、筑前の承天寺以来の参徒であった乾峰士曇（広智国師、一二八五―一三六一）が引きつづき東福寺にて士雲に随っており、[24] また「智覚庵開山大道和尚行状」によれば、大道一以（一二九二―一三七〇）も諸禅者に歴参して後、東福寺の士雲に参じている。[25] さらに「友山和尚伝」によれば、友山士偲（初名は友雲士思、一三〇一―一三七〇）も若くして父母の許しを得て東福寺の士雲の席下に投じている。[26] そして、これらの人々はともに聖一派の禅者として、その後も長く邵元と関わりを維持していくことになるの

である。

ただし、士雲は門下の学人を得度する際、多く法諱の上字に「士」または「景」を系字として付与しているが、邵元の場合、契源ないし邵元ともにこの原則に則っておらず、もともと士雲の子飼いの門人ではなく、得度以降に東福寺に到って士雲の門に投じていることが知られる。

東福寺にて士雲に器重せられた邵元は、士雲が鎌倉に赴いて後も、引きつづき亀谷山寿福金剛禅寺や瑞鹿山円覚禅寺などで士雲に随侍して参学していたものらしい。すなわち『南山和尚語録』「南山和尚住相陽瑞鹿山円覚禅寺語録」には、

重陽謝二古源首座一上堂。又見重陽景物寄、菊花新開在二東籬一、汾州一句明明意、不二是古源一説二与誰一。

という上堂が収められている。これは鎌倉円覚寺の住持として士雲が重陽の日（九月九日）にそれまで首座を勤めてくれた邵元に対して、任期満了となった際になした感謝の上堂にほかならない。おそらく邵元は士雲が円覚寺に住して以来、首座の重職を勤めていたのであろう。士雲は円覚寺山内の東籬に花開く重陽の菊花の中に明々たる祖師意を見るのであり、それをともに語り合えるのは古源すなわち邵元をおいてほかにないとするのである。首座としてよく勤めてくれた邵元を高く評価する士雲の心情が察せられよう。しかも邵元がすでにこのときは古源という道号を使用していた事実も判明するのである。

士雲が鎌倉の瑞鹿山円覚寺の第一一世に住したのは、「南山和尚行実」によれば、

文保元年丁巳六十四、住二円覚一。秋暮退レ山。又再住偈云、（中略）元応二年庚申六十七、住二建長一。

とあって、文保元年（一三一七）に当たることから、このとき邵元は二三歳で士雲に随侍して首座の職位を勤めていることになろうか。ちなみに中巌円月の『仏種慧済禅師中岩月和尚自歴譜』によれば、

文保元年丁巳、東明和尚遷二寿福一、南山和尚上二円覚一。

とあることから、それまで円覚寺の第一〇世であったのは邵元のかつての得度の師と見られる東明慧日にほかならない。[27] また夢窓派の青山慈永（士永・仏観禅師、一三〇二―一三六九）も「仏観禅師行状」によれば、

即潜往二洛東福一、易レ服受具、拝二円覚南山和尚一為二授戒師一、便入衆参堂。師音声和雅、容儀儼若也。臨レ夏首二堂司一、特請充二楞厳頭一。由レ是海内禅叢無レ不レ称二師名一。

とあるから、文保二年（一三一八）に京都東福寺に赴き、ついで鎌倉円覚寺の士雲を拝して受戒しており、さらに夏安居には堂司として楞厳頭（楞厳会の際の会頭）を勤めたとされる。[28]

したがって、首座であった邵元は円覚寺においてこうした若き円月や慈永らとも何らかの面識があったものと見られ

る。ちなみに円月は後に大慧派を継ぎ、慈永は後に夢窓派を継いでおり、邵元もまた士雲の下を去っている。その後、士雲は円覚寺に再住し、元応二年（一三二〇）には建長寺に陞住しているが、邵元はそれ以前には首座の職を辞しているわけである。

双峰宗源への参学

古源…及二双峯履一其席一、復職二侍司一相二継司蔵一。
扶桑…及二双峯国師履一其席一、亦充二侍司一。
延宝…南禅双峰宗源国師法嗣。
本朝…後依二双峰源和尚一、遂承二密契一。

ついで「古源和尚伝」や『扶桑禅林僧宝伝』によれば、士雲の後席を継いでその同門に当たる双峰宗源が東福寺の第一二世の住持になるに及んで、邵元は士雲の席下から宗源の門へと投じたことを伝えている。

宗源については伝記史料として「双峰国師年譜略」が存しているが[29]、それによれば、筑前（福岡県）の人であり、東福寺の円爾に投じて剃髪しており、はじめは逢源と称している。宗源の一八歳のときに円爾が示寂しており、その後、宗源は鎌倉禅林に赴き、円爾と同門に当たる無学祖元や松源派の大休正念（仏源禅師、一二一五―一二八九）さらに西磵子曇（大通禅師、一二四九―一三〇六）ら来日禅僧に参じて研鑽に努めたことが知られている。そして、宗源は嘉吉三年（一三〇五）には筑前太宰府の横岳山崇福禅寺に開堂出世して円爾に嗣承香を炷いている。ちなみに『南山和尚語録』「住城州恵日山東福禅寺語録」には「崇福双峯和尚到上堂」が収められていることから、この間、宗源が東福寺に士雲を訪ねていることが知られる[30]から、すでにその頃から邵元は宗源を見知る機会があったのかも知れない。

さらに「双峰国師年譜略」によれば、

正和四年乙卯〈五十三歳〉春、受二恵日之請一〈四月八日入レ寺〉。藤丞相、時々入レ山、諮二参禅要一、造詣益深、便拝レ師受二伽梨鉢多一。元応元年己未〈五十七歳〉、入二相陽一。

と記されていることから、宗源は正和四年（一三一五）春に東福寺の請を受け、四月八日（成道会）に士雲の後席を継いで東福寺第一二世として入寺していることが知られる。ときに邵元はいまだ二一歳という若さであり、おそらくは士雲の依託もあって宗源に付き随うことになったものと見られるが、その時期については実際には先の士雲との関わりからいって、いま少し以降のことではなかろうか。

この頃、内閣文庫所蔵『慧日山東福禅寺行令規法』（単に『慧山古規』とも）一巻が文保二年（一三一八）仲冬一一月の下澣に成っているから、邵元も士雲や宗源の席下に在った折は、こうした行規を実際に日々の行持として務めていたはず

であろう。ところがそうした中で宗源が住持であった東福寺では元応元年（一三一九）二月七日に大殿が炎上するという災難に遭遇している。

その同じ年の春に宗源は五七歳で執権（平副帥）の北条高時（相模太郎、一三〇三―一三三三）に迎えられて一時期ながら鎌倉に下向しており、[31] このとき同門の士雲を円覚寺に訪ねている。おそらく邵元が宗源を親しく見知ったのもこの時点からではなかったかと思われる。あるいはこのときに一旦、円覚寺の住持職を退いている士雲の依託もあってか、邵元は宗源の下に投じて随侍することになり、ともに帰京して東福寺に戻ったものとも推測される。

「古源和尚伝」や『扶桑禅林僧宝伝』によれば、邵元はやはりはじめは侍者として宗源の席下に親しく随侍していたとされ、宗源が席下に到った邵元を侍者に充てているのは、士雲の場合と同じく宗源としても自らの禅風を如実に邵元に伝えたかったためであろう。さらに「古源和尚伝」によれば、その後、邵元は昇任して蔵主（知蔵）の職位を司ったとされる。蔵主というのはもともと蔵殿（経蔵と看経堂）の主管のことを指しているが、すでに蔵殿自体の機能が有名無実化していた当時の中国・日本の禅林においては、蔵主の職位は一種の名誉職といってよいものとなっている。

宗源は元亨元年（一三二一）夏に勅命を奉じて八月晦日に京都東山の瑞龍山太平興国南禅禅寺に第七世として陞住していることから、邵元もこれに同行しているものと見られる。ちなみに「不聞和尚行状」によれば、この当時、東明慧日の門人であった不聞契聞の足跡として、

携往二相州瑞鹿一、東明和尚一見、職二其奇偉於眉睫之間一、俾レ為二駆烏属一。（中略）十四歳、日与剃染、受二戒叡山延暦寺一。十九歳、日遷二建長一、師随レ行、命レ侍二賓客一。職満遊二京城一、周二旋練虎関・源双峰二大士一。経二周歳一、又帰二関左一。

という記事が見い出される。[32] これは契聞が若くして慧日に学んで元応元年（一三一九）に一九歳で建長寺の知客を司った後に、上洛して京城に到って聖一派の虎関師練（海蔵和尚・本覚国師、一二七八―一三四六）と双峰宗源の二禅者に参じた消息を伝えるものである。邵元が同じように慧日の席下を離れて上洛して聖一派の士雲や宗源に参ずる経由もそれほど不自然なものではなかったことが改めて窺われよう。

同じく慧日の門人であった中巌円月も『仏種慧済禅師中岩月和尚自歴譜』に、

（元亨）二年壬戌夏、南禅曹峯和尚会下、作二五家符命一。済北和尚甚賞。

とあることから、元亨二年の夏に南禅寺の曹峯和尚（双峰）すなわち宗源に参じており、また、この間に「五家符命」を作って済北和尚すなわち師練より称賛されていることが知られ

ている。これも慧日門下の宏智派の徒が聖一派の宗源らと関わったことを如実に伝える事例といえよう。ちなみに元亨二年には南山士雲が建長寺を退き、東福寺山内の荘厳蔵院に閑居しており、またこの年八月には師錬が自ら編纂した『元亨釈書』三〇巻を上進しているなどの動きが見られる。

さらに「智覚庵開山大道和尚行状」によれば、大道一以も士雲が鎌倉へと遷った後、東福寺に留まって宗源の席下で請客を司り、宗源が南禅寺に陞住した際にもやはり参随して書記・知客・維那・蔵主などの職位を司っている。[33] 邵元もまた東福寺や南禅寺において、契聞・円月・一以ら宗源の席下に集った人々と何らかの関わりを持っていたはずであろう。

ところで宗源は自らの剃度の小師や門下に連なった禅者に対して、系字として「源」の一字を法諱の上字に付与しているらしく、法嗣には東福寺の第三三世となった洞天源深（？―一三六三）や同第五〇世となった大方源用（？―一三九〇）のほか、天祥源慶・玉田源璇・雪竇源光らの名が存している。しかし、邵元の場合は宗源の門に投じた後も、こうした双峰門下すなわち桂昌門派の系字を受けることはなかったわけであり、当時は宏智派にて安名された契源という法諱を通していたものと見られ、邵元という法諱も後に在元中に自発的に改名したものであろう。

このように邵元は聖一派桂昌門派の禅者として育成されていくわけであるが、宗源との間で交わされた機縁の語句などは残念ながら伝えられていない。わずかに『本朝高僧伝』のみが「後に双峰源和尚に依り、遂に密契を承く」と記しているものの、具体的には如何なる機縁によって宗源の密契を承けたのかも定かでない。

また宗源は正中二年（一三二五）には後に邵元も住することになる洛東の正法山大聖禅寺に開山として開堂住山していることから、この間、おそらく邵元も久しく宗源に随侍しているものと見られる。もちろん、早くから入元を果たさんとする意志を持ち合わせていたであろう邵元であれば、他の著名な禅者の門戸を歴参していたとしても何ら不思議ではなかろう。

幸いに宗源にはその語録として内閣文庫所蔵の『双峰国師語録』一巻が伝えられており、[34] その「自賛」の箇所に、

邵元首座請

君謂二相似一、任佗崖石裂、謂レ不二相似一、如何雷犇電掣。一味寒酸雪満レ顛、東山下事為レ誰決。

という自らの頂相に付した自賛のことばが伝えられている。これは宗源が首座であった邵元の請で自らの頂相に賛を付したものである。これは当時、席下で首座を勤めていた邵元の請に対して宗源が付し与えたものであり、おそらく宗源が東福寺か南禅寺に住持していた時期のことであろう。

これによって邵元が宗源の席下でも首座を勤めたことが知られるとともに、如何に宗源の信任を得ていたかが偲ばれよう。ただ、ここでは明確に「邵元」の法諱が記されているわけであるが、このときすでに邵元が自ら「邵元」という法諱を使用していたか否かは定かでない。あるいは『双峰国師語録』が編纂筆写されたと見られる貞治六年（一三六七）頃の時点で「邵元」の名に改められてまとめられているのかも知れないから、これをもって入元以前から「邵元」の法諱が通用していたという証拠にはならないであろう。

いずれにせよ、この宗源の自賛頂相が実際に何れかの寺院に現存していれば、邵元が入元以前に「邵元」と称していたのか、はたまた「契源」と称していたのかも判明しようし、この真賛が書かれた年月日が何時であったのかなど、いま少し詳しい実情が知られるものと見られる。

ちなみに宗源の席下に在って首座を勤めていた当時の邵元の足跡を知る上で注目すべきは、『播磨鑑』巻五「赤穂郡之部」の「赤穂郡仏閣」に、

金華山法雲寺、禅宗、赤松庄在二苔縄村一、京都相国寺末寺。開山、京都南禅寺宝覚真空禅師雪村大和尚。建武四年、赤松円心建立也。

峯相記に曰、暦応年中、友梅西堂の開山にて、諸山の中にても御願所也。供養の時、諸山より万人群をなすと、云々。又曰、後醍醐天皇正中年中に、東福寺の僧源(深とも)首座、坂越の庄に常楽寺を建立す。今の下高野村荒神の北山下森林の地なり。

という記事が存することであろう。これによれば、後に邵元自身も住することになる播磨（兵庫県）赤穂郡赤松庄の金華山法雲禅寺が、建武四年（一三三七）に赤松則村（法雲寺殿月潭円心、一二七七―一三五〇）によって開創され、一山派の雪村友梅（宝覚真空禅師、一二九〇―一三四六）が開山に迎えられている記事が述べられている。

そして、それとともに『峯相記』の記事として、正中年間（一三二四―一三二五）に東福寺の源首座という禅僧が、やはり赤穂郡坂越庄に常楽寺という禅寺を建立したという記載が存している。[35] 当時、邵元は契源と称していたことから、ここにいう源首座があるいは邵元のことではないかと推測されるわけである。ただし、問題は一にその常楽寺の開山が源首座ではなく深首座であるとされており、深首座とすれば邵元のことではなくて、邵元と同門で後に東福寺第三三世となった洞天源深のことを指しているとも解されるのである。

これが史実であれば、邵元が入元する以前の消息の一端が解明されることになるわけであるが、すでにこの常楽寺が廃絶して今日に伝えられていないだけに詳しい状況が何ら知られず、寺の変遷についても判明しないのが惜しまれる。ただ、邵元はこのときすでに三〇歳になっていることから、首

座位として一ヶ寺の開創に関与していたとしても不思議ではなかろう。

ところで、先に示した『双峰国師語録』巻末の「真賛」には、大道一以が師の宗源の頂相に付した真賛とともに、

又　古源和尚

国師為レ師、自為二国師一。龍生二龍子一、鳳産二鳳児一。千樹老松兮深レ根固レ帯、二株嫩桂兮分レ葉分レ枝。

又　同

胸襟虚欲蕩二乾坤一、道徳巍巍称二至尊一、恵日峰頭轟二霹靂一、瑞龍山下雨傾レ盆。

という師の宗源に対して邵元がなした二首の真賛を伝えており、これは『東福寺誌』の「建武二年（一三三五）」の宗源の項にも載せられている。宗源が示寂したのは建武二年一一月二二日であり、その全身は東福寺山内の塔頭桂昌庵の金充塔に納められており、宗源の門流はこれより桂昌門派と称されて聖一派の一翼を担っている。(36)

宗源が示寂した当時、邵元はいまだ在元中であって、このときに宗源の頂相に像賛を付することは不可能である。また邵元は宗源に対して国師の称を用いていることから、少なくともこの像賛が著されたのは暦応三年（一三四〇）一一月二〇日に亡き宗源に対して双峰国師の勅諡号が下賜されて以降であることも動かない。おそらく、この二首の真賛は入元帰国を果たした後に、邵元がすでに遷化していた先師宗源のために法乳の恩に酬いるかたちで記した祖賛であったものと見られる。帰国後の記事の箇所に載せるべきかも知れないが、年時が確定できないことから、宗源との関わりを伝えるこの箇所の中で触れたわけである。

この二つの宗源に対する真賛からして、おそらく宗源ゆかりの禅寺には実際に邵元が賛を付した「双峰国師頂相」がかつて伝存していたはずである。二首の頂相が宗源ゆかりの禅寺に現存していないことが惜しまれ、これらが今日に残されていれば、年月日や賛を付した当時の邵元の立場なども知られ、宗源が示寂して以降、邵元が聖一派としてなした活動の一端も判明するものと見られる。

入　元

古源…嘉暦丁卯、入二元国一。
扶桑…嘉暦間、入二元国一。
延宝…嘉暦初、渡レ海。
本朝…嘉暦二年、入レ元。

京都の東福寺・南禅寺叢林を中心に研鑽に努めてきた邵元は、その後、さらに参禅学道の徹底を期してか宗源の席下を離れて入元歴遊を果たすことになる。邵元の入元を「古源和尚伝」は「嘉暦丁卯」と伝えており、『本朝高僧伝』にいう嘉

暦二年（一三二七）と合致している。『扶桑禅林僧宝伝』や『延宝伝燈録』が伝える「嘉暦の間」とか「嘉暦の初め」というのも同様であろう。嘉暦二年は邵元の三三歳に当たっているから、当時の入元僧の年齢からすれば、必ずしも若いとはいえない。この年は元の泰定四年に当たっており、おそらくは商船にひとり身を託しての入元であったものと見られる。[37]

ちなみに「双峰国師年譜略」によると、この年には師の宗源が六五歳にして東福寺に再住しているから、あるいは邵元は当時の東福寺僧団ないし宗源の門下から選ばれて入元を果たしているのかも知れない。そして、宗源は邵元が元国に旅立ってより九年後、邵元の帰国を待つことなく、建武二年（一三三五）一一月二一日に世寿七三歳で示寂している。しかも「東福第十一世南山和尚行実」によれば、宗源と同じ年の一〇月七日には宗源に先立ってやはり邵元の参師であった南山士雲もまた世寿八二歳の生涯を終えている。[38] 一方「東明和尚塔銘」によれば、邵元の受業師と見られる東明慧日も暦応三年（一三四〇）一〇月四日に世寿六九歳で示寂していることから、邵元はそのいずれかの遷化も看取ることができなかったわけである。

しかも邵元が入元したのは鎌倉末期に当たっており、入元後まもなく日本においては、後醍醐天皇（一二八八―一三三九、在位は一三一八―一三三九）による元弘の変が起こり、やがて建武の新政から南北朝並立、さらに足利尊氏（初名は高氏、一三〇五―一三五八）による室町幕府の樹立などがなされているのであり、動乱に明け暮れる激動の時世を迎えている。邵元はそうした渦中に巻き込まれることなく、はるか異郷の地に在って元朝中国の山野を濶歩し、雲遊萍寄の日々を送っているのである。

師の宗源はかつて円爾のほか、破庵派の無学祖元をはじめとし、松源派の大休正念や西澗子曇さらに曹源派の一山一寧ら宋元からの来日僧に学んでおり、また邵元自身もかつて若くして鎌倉にて来日僧の東明慧日らに学んでいることなどから、そうした諸般の影響もあってか、邵元は早くから中国禅林に対する憧憬の念を培っていったものと見られる。

もちろん、当時すでにかなりの数の日本禅僧が元国の地を踏んでおり、元国からも著名な中国禅僧が来日を果たしているのであって、日元間の禅宗の交流には目を見張るものが存したことも事実である。こうした状況下に邵元の入元もまた位置づけられるのであろうし、一面でそんな時代の風潮に準じた行動であったとも解されよう。まして邵元はそれ以前に入元した一山派の雪村友梅や黄龍派の龍山徳見（真源大照禅師、一二八三―一三五八）らの例に見るごとき在元中に下獄される事件[39]などにも遭遇しておらず、比較的自由に参学・研鑽に努めることができたようである。

しかも、その後の邵元の在元中の動静からして、邵元はすでに日本に在る頃からかなり中国禅林の情勢に敏感であり、かつ偈頌などの漢詩文にも精通していたものらしい。入元時にはいまだ中国語がそれほど堪能ではなく苦労したようであるが、それが在元中に諸地を歴遊することによって、しだいに中国の人とも変わらないほどの上達ぶりを見せていったようである。

雪峰山の樵隠悟逸

古源…船（舩）着二明州一、直往二雪峯一、見二樵隠逸公一、書レ偈呈レ之。有下他時再上二毬門一日、一喝何妨三日聾之句上。逸称レ之。

扶桑…登二雪峰一、見二樵隠逸公一呈レ偈、有上他時再上二毬門一日、一喝何妨三日聾之語上。逸称レ之。

延宝…見二樵隠逸・（無見覩・断崖義一）。

本朝…見二樵隠逸於雪峰一、問レ法呈レ偈。

「古源和尚伝」によれば、邵元は商船にて明州（浙江省）すなわち元代の慶元路（宋代の慶元府）の港に着岸したとされている。しかし、これはその後の状況からして、あるいは福州（福建省）の誤りと解さなければならないかも知れない。仮に明州に着岸したにせよ、邵元はさらに商船にて南下し、ただちに福州の地へと赴いているのであって、当時、日本僧の多くが訪問することを常とした明州内の諸禅院に拝登していない。しかも「古源和尚伝」や燈史・僧伝の記事内容を窺う限り、邵元はその後も杭州（浙江省）や明州に存した禅宗五山などに到った形跡はなく、どちらかというと地方の禅院に化導を敷いた幽玄枯淡の禅者に多く参学している傾向が見られるのも特徴的であろう。

そして、福州に着岸した邵元は、直ちに福州侯官県西一八〇里の雪峰山崇聖禅寺に赴いていることが知られる。すでに述べたごとく邵元が天童山景徳禅寺や阿育王山広利禅寺などの明州鄞県の諸禅刹に立ち寄ることもなく、明州から遥か南の福州雪峰山に直ちに到っていることからすれば、はじめから雪峰山を参学の対象として目指していたことになろう。当時はすでにそれまで多くの日本僧が参学の対象としていた破庵派の中峰明本（幻住老人・智覚禅師・普応国師、一二六三―一三二三）や宏智派の雲外雲岫（妙悟禅師、一二四二―一三二四）などは示寂しており、松源派の古林清茂（金剛幢・扶宗普覚仏性禅師、一二六二―一三二九）も晩年に近くなっていることから、邵元としては新たな中国禅僧をその参学の対象として求めねばならなかったわけである。

「古源和尚伝」や燈史・僧伝によれば、そんな中で邵元は入元のはじめに福建第一の名刹として知られた雪峰山に掛搭し、直ちにときの住持であった樵隠悟逸（仏智禅師、一二六一―一三三四）に学んでいることが知られる。雪峰山（象骨峰）

に存する崇聖禅寺は古く応天雪峰禅院と称し、唐末五代に青原下の雪峰義存（真覚大師、八二二―九〇八）が閩王の王審知（字は詳卿、八六二―九二五）の帰依を得て開創しており、南宋末期から元代には禅宗十刹の第七位に列するなど、当時、福州随一の名刹として名声を馳せていたのである。

ところで邵元が入元して最初に参学した樵隠悟逸は、破庵派の愚極智慧（至慧とも、仏心禅師、？―一三〇〇）に法を嗣いだ禅者であり、南宋末期の無準師範と同門に当たる石田法薫（仏海禅師、一一七一―一二四五）の法孫にほかならない。[40]『雪峰志』巻五「紀当山」によれば、悟逸は福州懐安の人で、智慧の法を嗣いで後、雪峰山の第五三代の住持となっており、実に三度にわたり雪峰山に住していることが知られる。[41]

では、いったい邵元はなぜ入元のはじめに遥か南方の雪峰山に赴いて悟逸の席下に投じたのであろうか。その背景は明確ではないが、悟逸が日本の嘉暦元年（一三二六）に我が国に渡来している清拙正澄（大鑑禅師、一二七四―一三三九）と同門に当たることから、あるいは邵元は翌年の入元に際して、あらかじめ正澄の紹介状のごときものを所持して悟逸の席下を訪ねているのかも知れない。[42]

邵元が到った頃には、悟逸は泰定二年（一三二五）に雪峰山に三住していた時期に相当しており、この間、堂塔伽藍の復興に尽力していることから、当時、福州随一の禅者として名声を馳せていたといってよい。悟逸には『樵隠和尚語録』二巻が現存しているが、残念ながら邵元に関するような記載は見い出せない。悟逸は元統二年（一三三四）に世寿七三歳で示寂しているものと見られ、法臘などは不明であるが、崇聖寺の西に存した海会塔の西に墓塔が建てられている。

ちなみに入元して悟逸の席下に参じた日本僧としては、邵元のほかにも数名の禅者が知られている。すなわち、邵元と同じく聖一派の禅者で悟逸に参じている人として、何れの禅寺で参学したかは記されていないものの、一峰通玄が在元中に悟逸に学んだ経験が存しており、また友山士偲（一三〇一―一三七〇）も嘉暦三年（一三二八）に法兄の正堂士顕とともに入元した後、悟逸にも参学している。さらに無夢一清（一二九四―一三六八）も在元中の至順三年（一三三二）頃に雪峰山の悟逸に参じて「無夢」の道号頌を受けている。このように邵元が悟逸に参随したのと前後して、聖一派の人々が同じように相継いで悟逸を訪ねているわけである。

このほか、清拙正澄の高弟である大鑑派の古鏡明千（？―一三六〇）も入元して雪峰山に悟逸を訪ねて蔵司を勤めており、さらに悟逸が杭州（浙江省）銭塘県西の南屏山浄慈報恩光孝禅寺に遷住したのにも随侍している。[43]正澄が悟逸と同門に当たることから、法姪の明千が法伯の悟逸を訪ねているのであろう。また仏源派の礼智なる者が蔵主として入元して雪峰

山の悟逸を訪ね、至順四年（一三三三）に師の鉄庵道生（本源禅師、一二六二―一三三一）の『鈍鉄集』に悟逸の跋文を得て帰国している。(44)

ところで、雪峰山の悟逸に参じた邵元は偈頌を書してこれを悟逸に呈している。その偈頌とは全文は知られないものの、「他時再上三毬門一日、一喝何妨三日聾」という語句であったとされ、これを目の当たりにした悟逸は若き邵元をことのほか称嘆したと伝えられる。入元当時、邵元はいまだ中国語（ここでは福建語か）に精通していなかったため、紙面に自らの境界を認めて悟逸に上申したのであろう。この悟逸に呈した偈頌は邵元の在元中の作品として、帰国後の日本禅林においても知られたものであろうが、その全文が伝えられないのは惜しまれよう。

ただ、邵元の偈頌にいう「他時、再び毬門に上るの日、一喝、何ぞ妨げん、三日聾することを」の内容からして、明らかに雪峰山の開山始祖である雪峰義存に因む「雪峰輥毬」の古則(45)と、福州の出身であった唐代の百丈懐海（大智禅師、七四九―八一四）に因む「百丈三日耳聾」の古則(46)に基づいてなされたものであることが知られる。参学の志を懐いて入元し、ようやく雪峰山に到着した邵元の意気込みが窺われるとともに、その禅学の研鑽や漢詩文の素養の深さが知られる逸話といってよい。このように邵元は悟逸の席下で参禅弁道に努めているわけである。

無見先覩への参学と天台石橋

古源…往三天台一、見三覩無見一。以三語未レ通、書述三来意一。覩高声誦了、擲レ地呵曰、汝超レ海越レ漠、得得遠来、有三何閑工夫一、写レ字与レ做三言句一、俱得三其妙一如レ此。師至三方広寺一、度三石橋一献三茶於羅漢一、時感三茶甌現レ華。

扶桑…去上三天台一、礼三無見覩和尚一。以三語未レ通、疏三来意於紙一、蒙三覩激発一。至三方広寺一、度三石橋一供三阿羅漢一、感三茶中現レ華。

延宝…見三(樵隠逸・)無見覩（・断崖義一）。

本朝…去登三天台一、礼三無見覩一。以三語未レ通、疏三筆来意一。覩誦呵曰、爾有三什麼閑工夫一、至三如レ此語妙一。激発誘誨。至三方広寺一、度三石橋一供三茶羅漢一、感三甌中現レ華。

ついで「古源和尚伝」や燈史・僧伝によれば、邵元は福州雪峰山の悟逸の席下を離れ、北上して台州（浙江省）天台県に到り、県北の天台山の華頂峰に存する華頂善興禅寺においてやはり破庵派に属する無見先覩（妙明真覚禅師、一二六五―一三三四）に相見したことが知られる。

ただし、『延宝伝燈録』に載る「当晩小参」には「拄杖子、二十年来未三曽離二左右一。有時洞庭瀟湘、行到三水窮処一、有時天台雁蕩、坐看三雲起時一」という表現が見られることから、この間、行程からして邵元は福州の雪峰山より台州に到る行

脚の途中、温州（浙江省）にて楽清県東九〇里の北雁蕩山などにも立ち寄っているらしいことが知られる。小参では「有る時は天台・雁蕩にて、坐して雲の起こる時を看る」という表現から、天台山から雁蕩山に赴いたかの感があるが、これは語呂の関係によるもので、先に福州から雁蕩山に到っていることは動かないであろう。

『雁山志』四巻などによれば、北雁蕩山は天下の奇峰として知られ、頂上に雁湖（平湖）があり、大龍湫などの瀑布も存している。[47] 山中には多くの寺院が建立されており、禅宗甲刹の一つで臨済宗仏眼派の竹庵士珪（一〇八三―一一四六）が禅刹開山となった能仁普済禅寺なども存することから、邵元はこれらを参観歴訪しつつ北上しているものと見られる。雁蕩山は古来、霊場として知られていることから、入宋・入元した日本僧でこの地に到った人も多くその奇岩・勝景に親しんでいる。邵元も雲の沸き起こる雁蕩山の幽邃な風光の中にしばし自ら遊んだことであろう。

ついで邵元が天台山に到って学んだとされる無見先覩は天台県仙居の葉氏の出身で、台州黄巖県西北四〇里の瑞巖浄土禅院にて無準系の方山文宝に参じてその法を嗣いでいる。先覩には語録として『無見覩禅師語録』二巻が伝えられている[48]が、残念ながらやはり邵元に関わるような記事は見い出せない。語録に付される大慧派の夢堂曇噩（仏真文懿禅師、一二八五―一三七三）が撰した「無見覩和尚塔銘幷序」によれば、先覩は華頂寺に宴坐すること実に四〇年にも及び、南宋初期に華頂山頂に独居した仏眼派の高庵善悟（一〇七四―一一三二）の故址に草庵を結び、善悟の再来と称せられた孤高の禅者であったとされる。[49]

天台山は天台県の城北三里に存する名山であり、古く隋代に天台智顗（智者大師、五三八―五九七）が県北二九里の修禅寺（後の大慈寺）を開創したことによって中国天台宗発祥の故地とされている。『嘉定赤城志』巻二八「寺観門」の「天台」の「善興院」の項などによれば、華頂寺は善興院ともいい、県東北六〇里の天台山中の華頂峰に存しており、古くは華頂円覚道場と称していたとされる。[50] 天福元年（九三六）に法眼宗の天台徳韶（八九一―九七二）によって創建され、智顗がかつて宴坐した地と伝えられて智者降魔塔などの名勝旧跡が残っている。天台県北一〇里にある仏隴峰麓の景徳国清禅寺や同西北五〇里にある列秀峰下の平田の万年報恩光孝禅寺などとともに華頂寺は天台山中の名刹として知られ、伽藍は現今に及んでいる。

そして、先覩の席下にはその道風を慕って日本からの来参者もかなり存したことが知られている。すなわち、早くに幻住派の古先印元（正宗広智禅師、一二九五―一三七四）は文保二年（一三一八）に入元して直ちに華頂寺に赴いて先覩に参じ、

数ヶ月間にわたり参禅学道しているが、まもなく西天目山の中峰明本に学んでいる。さらに大覚派の寂室元光(円応禅師、一二九〇―一三六七)や大応派の可翁宗然(普済大聖禅師、?―一三四五)も在元中に華頂寺において先覩に謁している。また、これに遅れて聖一派の禅者でも南山士雲の法嗣である正堂士顕は入元して諸禅者に参じ、先覩に随って印可を受けているし、同じ聖一派の無夢一清や友山士偲も在元中に邵元と同じように先覩に参学している。一方、曹洞禅者との関わりでも、臨済宗法燈派の禅者で永平下瑩山系とも深く関わったことで知られる孤峰覚明(三光国済国師、一二七一―一三六一)や瑩山系明峰派の祇陀大智(一二九〇―一三六六)が在元中に華頂寺の先覩に学んでいる。また宏智派でも東明慧日の高弟である別源円旨と不聞契聞が在元中にそれぞれ華頂寺に赴いて先覩に参じている。(51)

ところで、「古源和尚伝」や『扶桑禅林僧宝伝』『本朝高僧伝』によれば、当時、先覩に参じた邵元はいまだ中国語(ここでは浙江語か)にあまり堪能でなかったため、やはりここも書状にて来参の意を述べたとされている。邵元が呈した書状を受け取った先覩は高声に誦し終わると、これを地に投げ捨て、邵元に向かって「汝、海を超え漠を越え、得々として遠来す、何の閑工夫有りてか、字を写すと言句を做すと、倶に其の妙を得ること此の如きや」と呵したとされる。

これは表向きは呵していながらも、邵元の示した文章があまりに優れていたために、先覩がその才を認めて絶賛したことを意味する内容にほかならない。閑工夫とは原意としては「つまらぬ思量分別をはたらかせる」ことであるが、ここではかなりの努力を払った研鑽を意味していよう。また『本朝高僧伝』には「激発誘誨す」とあるが、激発とは励まし起こすこと、誘誨とは導き教えることであるから、先覩が邵元の力量を高く評価して接化指導したと解しているわけである。おそらく邵元はこうした漢詩文の才覚を日本に在る頃に十分に習得していたものと見られ、邵元を含めて当時の日本禅林における漢詩文の水準がかなり高まっていたことの左証でもあろう。後に邵元が中国禅僧のために石碑の銘文を撰述するに至る背景などもおよそ察せられるわけである。

ついで「古源和尚伝」や『扶桑禅林僧宝伝』『本朝高僧伝』によれば、邵元はさらに天台山中の天台県北五〇里の方広寺に赴き、天台石橋すなわち石梁瀑布を渡って羅漢に茶を献じている。天台石橋とは方広寺(いまの上方広寺)の付近に存する瀑布であって、古くより五百大阿羅漢が示現する霊域とされており、方広寺には五百羅漢像が安置されている。(52)そして、邵元も石橋にて羅漢に茶を献じた際に、茶甌の中に華が現ずるという奇瑞を感じたとされている。

この天台石橋には日本からも多くの入宋・入元僧が訪れて

その霊験に預かったとされており、邵元としても五百羅漢らの賢聖・神仙が居住するとされる天台石橋への拝登は、入元以前から予め計画されていたことであろう。おそらく邵元は華頂寺を拠点として天台山内の多くの寺観・霊蹟を参観拝登しているものと見られる。

天目山の断崖了義

古源…見二義断崖於天目一、義相迎一笑。

扶桑…（又遊二五臺一）、見二断崖義于天目一。

延宝…見二（樵隠逸・無見覩・）断崖義一。

本朝…謁二断崖義於天目一。

さらに「古源和尚伝」や燈史・僧伝によれば、邵元は天台山を去って後に、杭州（浙江省）於潜県西四五里にある西天目山に赴いており、破庵派の断崖了義（仏慧円明正覚普度大師、一二六三―一三三四）に相見していることが知られる。ただ、『扶桑禅林僧宝伝』のみが後に示す五臺山への歴訪を先に記しているのは明らかに記事内容の混同であろう。

了義は西天目山の高峰原妙（普明広済禅師、一二三八―一二九五）の高弟の一人であって、彼の中峰明本とは同門に当たっている。了義に関しては元代の文人である虞集（字は伯生、一二七二―一三四八）の撰した「断崖和尚塔銘」が『道園学古録』巻四九に収められており、その詳しい事情が知られる。[53] 了義は湖州（浙江省）徳清の人で、原妙の法を嗣いでおり、「断崖和尚塔銘」には、

元貞乙未、高峯示寂、師亦韜晦。或游二禅林一、頽然居不レ板、孤峭厳峻、不レ仮二借人辞色一。或触二其機鋒一、発レ言如二奔雷一、諸方客衲、莫レ不二驚歎一。居不レ択レ地、随レ寓而休、而律範大閑、凛如二氷雪一。所レ至四衆帰重、公侯貴人、争相迎奉無二虚日一。師子正宗禅寺、累請二住持一、若レ不レ聞レ召、未二嘗受レ請、立僧而咸尊レ之曰二義首座一云。中峯本公、大揚二高峯之道一、恒赫昭著、法席之盛、中外罕レ及。至治癸亥、棄レ衆而化。同門布袍雍公、見地明白、提唱超卓、而去レ世更久。

と記されている。了義はまさに隠遁韜晦の禅風を特徴とし、機鋒峻烈な学人接化をなしていたことが知られる。しかしながら、大覚正等禅寺の布衲祖雍（？―一三一七）や幻住庵の中峰明本といった同門が相継いで示寂して後、泰定三年（一三二六）には西天目山の半山師子巌に存した師子正宗禅寺に住して化導を敷いている。[54] おそらく邵元が了義に参じたのも正宗寺でのことであったと見られる。また『西天目祖山志』巻四「蔵書」などによれば、了義には『断崖禅師語録』が存したとされるもの[55]の、残念ながら現今に伝えられていない。

ところで、同門の明本が多くの日本僧を会下に奔走せしめたのに比すると、了義に参じた日本僧の数は存外に少ない。すなわち、邵元のほかには、わずかに法燈派の孤峰覚明と大覚派の寂室元光および大応派の可翁宗然の名が知られるのみ

にすぎない。[56] ただ、これらの人々はともに邵元より早くに入元帰国を果たしていることからして、了義への参学も邵元はかなり遅れていたといえる。おそらく邵元はもともと明本の幻住の宗風を慕っていたものと見られ、すでに亡き明本の代わりにその遺風を同門に当たる了義の風貌の中に垣間見ようとしたのではなかろうか。

「古源和尚伝」のみが邵元が了義に相見した際の逸話として、わずかに「義、相い迎えて一笑す」という記事を載せている。すなわち、了義は邵元を席下に迎え入れて一笑したとされ、これは一見して邵元の力量を見抜いて満足したことを意味するものであり、あたかも釈迦牟尼仏と摩訶迦葉との間に交わされた「拈華微笑」の故事のごとく、両者の間にことばを超えて相い通ずるものが存したのであろう。きわめて簡略な記述ではあるが、これも邵元の器量を物語る貴重な逸話といってよい。「断崖和尚塔銘」に、

参学之衆、輻湊而至。或示レ衆曰、除二却語黙動静一、道二将一句一来。又嘗曰、一息不レ来、向二何処一安身立命。然或嬉笑怒罵、犇言穢語、人所レ不レ堪。或不レ因二勧請一、自肆談説、或成二頌偈一、不レ待二思惟一、応レ機而発二人所レ莫レ測。

とあるように、了義はその接化がきわめて厳峻にして人の計り知れないところが存したとされ、語黙動静を除却して一句を述べることを参学の徒に求めている。そんな了義をして相い迎えて一笑せしめているところに、当時の邵元が如何に深い参学眼を具えていたかが偲ばれよう。

伏龍山の千巌元長

古源…復在二龍山一、就二千岩長公一、需二於法語一。長臂胸与二一拳一曰、吾這裏無二法語一。師曰、謝二和尚法語一。爾後長見レ師、常必竪レ拳示レ之。

扶桑…参二千巌長于龍山一、求二法語一。長劈二胸一拳一曰、吾者裏無二法語一。師曰、謝二和尚法語一。遂依二席下一。自後長見レ師、必挙レ拳示レ之。

延宝…久参二千嵓長一、一日需二法語一。嵓与二一拳一曰、這裏無二法語一。後毎レ見レ師、竪レ拳示レ之。遂得二啓発一。

本朝…参二千巌長於龍山一、就需二法語一。長劈二胸一拳一曰、吾者裏無二法語一。元曰、謝二和尚法語一。爾後毎レ見、元竪レ拳示レ之、因有レ所二啓発一。

その後、さらに邵元は婺州（浙江省）金華県烏傷の伏龍山に到り、やはり破庵派の千巌元長（仏慧円明広照無辺普利大禅師、一二八四―一三五七）に随侍しており、この点は「古源和尚伝」をはじめ燈史・僧伝が一様に伝えている。元長は越州（浙江省）蕭山の人であり、蘇州（江蘇省）の師子林に住した天如惟則（仏心普済文慧大辯禅師、?―一三五四）[57] とともに中峰明本に法を嗣いだ高弟として知られ、先の了義にとっては法姪に当たっている。おそらく邵元は了義らから明本の法嗣の第一人

者として頭角を現していた元長の存在を聞き知り、金華の伏龍山に到っているのであろう。

元長は明本に嗣法した後、宣政院などからの諸山入寺の要請を固辞し、杭州城南の天龍山（臥龍山とも）の感業寺（古く天龍寺）に到って東庵に隠棲して師の明本の幻住の宗風を貫いたとされる。その後、元長はようやくに伏龍山の無明禅寺に出世開堂しているが、邵元が入元した同じ年の泰定四年（一三二七）一〇月には伏龍山中の荒廃していた聖寿禅寺を修復して住持していることから、邵元が参じたのもおそらく聖寿寺においてのことであろう。元長の語録としては『千巌和尚語録』一巻が伝えられ、[58] 巻末に元末明初の宋濂（字は景濂、一三一〇―一三八一）の撰した「仏慧円明広照無辺普利大禅師塔銘」が付されており、これは『宋文憲公全集』巻四二にも収められている。

元長に参じた日本僧としては、邵元のほかにも幾人かの名が知られている。[59] すなわち、邵元の入元後に東福寺の双峰宗源に学んだ経験のある大拙祖能（広円明鑑禅師、一三一三―一三七七）が入元して伏龍山の元長に参じており、至正六年（一三四六）に後堂首座と前堂首座を勤め、大拙の道号と印可証明を受けてその法を嗣いでいる。同じく碧巌璨（？―一三六五）もほぼ祖能と行動を共にしており、やはり首座を勤めて元長の法を嗣いでいる。また入元して破庵派の古梅正友（仏日広智禅師、一二八五―一三五二）の法を嗣いだ無文元選（聖鑑国師、一三二三―一三九〇）もその後、伏龍山の元長にも参じている。ただ、これらの人々はともに邵元よりかなり遅れて元長に参じていることから、日本僧としては邵元が元長に参じた最初期の禅者ということになろう。

とりわけ、元長に関しては「仏慧円明広照無辺普利大禅師塔銘」に、

初伏龍山有禅寺号聖寿、其廃已久。当師入山時、郷民咸夢有異僧来。遂相率登巉巌披蒙茸、以訪焉。見師宴坐不動、各持食飲之物献之。邑大姓楼君如浚・楼君一得、各為伐木搆精廬以安。師尋因旧号建大伽藍、重楼傑閣、端門広術、輝映林谷。内而斉魯・燕趙・秦隴・閩蜀、外而日本・三韓・八番・羅甸・交趾・琉球、莫不奔走。膜拝咨決心学留者恒数百人、至有求道之切断臂師前以見志者。師各随其根性而為説法、譬如一雨所施、小大根茎悉獲沾潤。

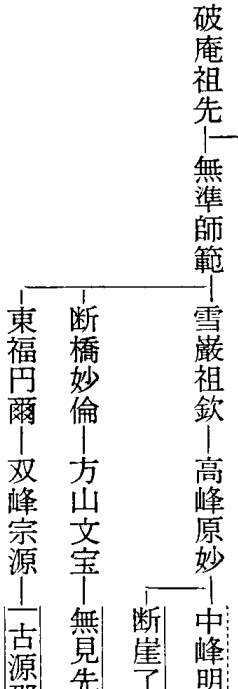
とあることから、当時、伏龍山の元長の席下には中国国内の中心地域からはもちろんのこと、日本や三韓（当時は高麗）さらに八番（いまの貴州省定番県に存した蕃族の名）・羅甸（貴州省にあった国名）・交趾（いまのベトナム北部）・琉球（沖縄）など海内外の諸地域からもかなり多くの参学の徒がその宗風を慕って求法のために来遊していたことが知られる。

とくに国外では日本を最初に挙げているから、日本僧の来

参はかなりに及んでいたのかも知れず、また琉球からの参学者も存したとされるのは注目すべき記載であろう。実際に『千巌和尚語録』「偈頌」によれば、「日本義上人」「送二日本透侍者一」などの偈頌も収められていることから、邵元・祖能・碧巌璨・元選らのほかにも義上人や透侍者など幾人かの日本僧が参学していたことが知られている。かつての中峰明本の場合と同じようにその法嗣元長の活動も中国内外の諸地域の仏教にかなりの影響を与えていたものと推測され、邵元もまた日本から赴いた一介の禅者として、まさに元長の席下の一員に連なって親しくその提撕を受けているわけである。

ところで会下に参じた邵元が元長に法語を求めると、元長は臂で邵元の胸に一拳を与えて「吾が這裏に法語無し」と答えている。これに対して邵元が「和尚の法語を謝す」と礼を述べると、それ以後、元長は山内で邵元に会うごとに常に拳を竪てたとされる。元長が邵元の器量を認め、かなり親しい好感を持っていたことが察せられる。ちなみに『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』のみは、この商量によって邵元は啓発するところがあったとされ、証契の機縁のごとくに扱っているのは興味深い。

このように邵元はその参学のはじめに福建から浙江へと歴遊し、江南地域の臨済禅者に歴参していることが知られるわけである。とりわけ注目すべきは、邵元が在元中に江南禅林において参学したことの知られる臨済禅者が、ともに南宋中期に活躍した虎丘派の破庵祖先（一一三六―一二一一）を派祖に仰ぐ破庵派に属する人々であったことであろう。彼の東福寺開山の円爾も祖先の法孫に当たっており、邵元が参学した江南禅僧も石田法薫と無準師範の二禅者の系統に限られている。いま、改めて邵元とその参学した江南禅僧らを系譜によって示すならば、つぎのようになろう。



このようにそのすべてが臨済宗破庵派の禅僧で占められていたことが判明するのであって、これはおそらく邵元が属した聖一派祖の円爾が無準師範の法嗣であったことに起因しているものと見られ、邵元はこうした縁故に基づいて江南諸地の禅者に歴参しているのであろう。ちなみに邵元が参学した破庵派の禅者らがこの頃に相継いで示寂している。すなわち、断崖了義が元統二年（一三三四）の一月に、無見先覩が同じく五月に、さらに樵隠悟逸もその年内にと、千巌元長を除いた他の禅者が続けざまにこの世を去っている。邵元として

もいまだ在元中であっただけに、これら参学の諸師の相継ぐ遷化の悲報は辛く悲しいできごととして受け取られたはずであろう。

すでに江南においては曹洞禅者では東明慧日の法兄に当たる雲外雲岫が示寂して以降、その法嗣の無印大証（仏日円明慧辯禅師、一二九七―一三六一）などを除いてそれほど名の通った禅者の活動が見られなくなることから、邵元が在元中に宏智派の人々と関わりを持ち得なかったことは十分に推測される。ただ、臨済宗では破庵派の人々のほかにも、松源派には日本の南浦紹明（大応国師、一二三五―一三〇八）と同門に当たる霊石如芝（仏鑑禅師、一二四五―？）や、来日した清拙正澄の俗兄である月江正印（松月翁・仏心普鑑禅師、一二六七―？）らが化導を敷いており、大慧派にも元叟行端（慧文正辯仏日普照禅師、一二五五―一三四一）や笑隠大訢（広智全悟大禅師、一二八四―一三四四）といった禅匠が活動しているなど、諸派の禅者も元朝の中央禅林に名声を馳せていた時期であるだけに、邵元がそれらの古老に参学した形跡が見られないのは一見、不可解であり、その点からもはじめはかなり日本での聖一派の縁故を頼って行動していたことが察せられよう。

あるいは邵元としては、しだいに文人風味の詩壇の禅風を形成していた松源派や、貴族化して官僚志向が強まっていた大慧派などに対しては、あまり好ましい感情を抱かず、かえって明本・了義・元長ら西天目山に集った破庵派の人々に見られるごとき、権力にむやみに靡かない隠遁的な幻住の宗風に惹かれていたのかも知れない。

中峰塔への拝登と湖南への遊方

古源…初往下レ山、礼二中峯塔一。投二宿塔下一、夢四中峯親為説法、挙三教中云、妙性円明、離二諸名相一。師感激不レ已。

扶桑…初礼二中峰国師塔一、宿二塔下一、夢四国師親為説法、挙三教中云、妙性円明、離二諸名相一。師感激不レ已。

延宝

本朝…礼二中峰国師塔一、投二宿塔下一。夢四国師親為説法、挙三教中云、妙性円明、離二諸名相一。元感激不レ已。

その後、「古源和尚伝」や『扶桑禅林僧宝伝』『本朝高僧伝』によれば、邵元は伏龍山の元長の席下を辞して山を下り、再び西天目山に赴いて中峰国師塔を拝登している。中峰塔とはいうまでもなく元代の禅宗史上に名高い中峰明本（幻住老人）を祀る墓塔にほかならない。

明本はすでに邵元が入元する以前の至治三年（一三二三）八月一四日に世寿六一歳で示寂して久しく、智覚禅師や普覚国師の諡号が存していることから、当時、中峰国師と尊称されている。『西天目祖山志』巻二「建置」によれば、明本の墓塔は西天目山の千丈巌に存して法雲塔と称されたとされ[60]、近

くには明本の師である高峰原妙の重雲塔もあり、また邵元が先に参じた断崖了義の墓塔もこの地に建てられて雲深塔と称せられることになる。もちろん、山中には別に明本が宴坐した草廬である幻住庵も存していたのであるから、邵元はこの庵をも拝登しているものと見られる。[61]

邵元は中峰塔下に投宿していた際に、明本が親しく自らのために説法してくれている夢を見たとされる。その夢の中で明本は教中すなわち『首楞厳義疏注経』にいう「妙性は円明にして、諸の名相を離る」という言句を拈提するのであり、[62] 邵元はこの霊夢に感慨無量のものがあったとされる。この句は仏性は欠けることなく円かに具わり、もろもろの姿かたちを離れているという意味である。

かつて明本の席下には数多くの日本禅僧が来参した因縁があり、彼らはそれぞれ明本の禅風を継承して日本に帰り、隠遁的な幻住派の門流を形成している。ちなみに明本の法を嗣いで帰国した日本僧としては、復庵宗己（大光禅師、一二八〇―一三五八）・遠渓祖雄（一二八六―一三四四）・明叟斉哲（？―一三四七）・無隠元晦（法雲普済禅師、？―一三五八）・古先印元（正宗広智禅師、一二九五―一三七四）・業海本浄（？―一三五二）および関西義南（南菩薩）らの名が知られており、ほかにも参学してその影響を受けた人は臨済・曹洞両宗にわたってかなりの数に上っている。おそらく邵元も入元以前からそうした状況を十分に熟知していたものと解さなければならない。

ところで、同じ入元僧で聖一派の友山士偲の『友山録』巻上の冒頭に掲載される「東福友山和尚行状」によれば、

> 此時吾国一路郷曲之在二元国一者、玖石室・清無夢・在此山・浩無涯・玄一峯・千古鏡・邵古源十数輩也。

という記事が見られるから、至元年間（一三三五―一三四〇）から至正年間（一三四一―一三六七）の初めにかけて、邵元や士偲が松源派の石室善玖（一二九三―一三八九）・聖一派の無夢一清・仏光派の此山妙在（一二九六―一三七七）・仏源派の無涯仁浩（一二九四―一三五九）・聖一派の一峰通玄・大鑑派の古鏡明千ら多くの日本僧とともに、元朝禅林に在って活躍していた状況を伝えている。[63] おそらく邵元は在元中にこうした同じ日本からの入元僧と親しい道交関係を保ちつつ歴遊していたものと見られる。

そして、すでに述べたごとく『延宝伝燈録』に載る「当晩小参」には「拄杖子、二十年来未二曾離一左右一。有時洞庭瀟湘、行到二水窮処一、有時天台雁蕩、坐看二雲起時一」という表現が見られるのであって、その後、邵元は浙江の地より西に向かい、遥か湖南の地に到り、潭州（湖南省）の洞庭湖において瀟湘八景などを巡っているものらしい。「古源和尚伝」その他が一切触れていないのは問題であろうが、瀟湘八景とは瀟水と湘水の二つの河と洞庭湖をめぐる湖南北部の絶勝の地

のことであり、多くの文人墨客がこの景勝地を訪れるのを常としている。わずかな「当晩小参」の語句からの類推であるが、多くの著名な浙江の中国禅者に歴参した後、さらに江西・湖南の地に中国禅宗の史蹟を雲遊する邵元のすがたが偲ばれよう。

ちなみに仏光派の此山妙在が在元中に撰した詩文集である『若木集』の「道号」に、

古源

濫觴難レ識是何年、派出二空王仏已前一、流落到レ今千万劫、了無二涓滴一謾相伝。

という道号頌が伝えられている。妙在は信濃（長野県）の人で、無学祖元の高弟である高峰顕日（仏国国師、一二四一―一三一六）を下野（栃木県）那須の東山雲巌禅寺に訪ねてその晩年の法嗣となっており、邵元と同じ頃に入元しているものと見られ、至元二年（一三三六）や至正元年（一三四一）の夏安居には、潭州劉陽県西南八〇里の石霜山崇勝禅寺において首座を勤めた経験も存している。『若木集』はその妙在が在元中になした詩偈・散文などを集めたものである。(64)

この道号頌が確実に邵元のために撰せられたものであれば、在元中の邵元と妙在との関わりが知られるわけであるが、妙在の方が邵元より年少であることから、この道号頌が邵元に与えたものか否かは明確でない。もちろん、両者が同じ湖南の地などで交流を持つ機会は存したものと見られ、あるいはそのときに同じ日本からの入元僧として、あえて一歳年長の邵元に対して妙在が道号頌を与えているのかも知れない。

註

（1）東福寺における聖一派の諸系統としては、駒沢大学図書館所蔵『慧日山東福禅寺宗派』の「東福寺十三塔頭」や『本朝僧宝伝』巻上などに基づいて整理すると、

一、三聖派　東麓山三聖護国寺　宝覚禅師〈第二世東山湛照〉塔
二、龍吟派　枯木山龍吟庵　仏心禅師・大明国師〈第三世無関普門〉塔
三、栗棘派　金剛山栗棘庵　仏照禅師〈第四世白雲慧暁〉塔
四、正覚派　碧玉山正覚庵　仏智禅師〈第五世山叟恵雲〉塔
五、永明派　我浄山永明院　円鑑禅師〈第六世蔵山順空〉塔
六、東光派　東光寺　大智海禅師〈第七世無為昭元〉塔
七、正統派　正統（燈）院　法照禅師〈第八世月船琛海〉塔
八、大慈派　大慈庵　仏通禅師〈第九世癡兀大慧〉塔
九、盛光派　盛光院　仏印禅師〈第十世直翁智侃〉塔
十、荘厳派　万年山荘厳蔵院　南山和尚〈第十一世南山士雲〉塔
十一、桂昌派　霊芝山万年桂昌庵　双峰国師〈第十二世双

峰宗源〉塔
十二、本成派　本成寺　普円国師〈第十三世潜渓処謙〉塔
十三、大雄下　大雄庵　天柱和尚〈第十四世天柱宗昊〉塔

という東福寺の第二世東山湛照（宝覚禅師、一二三一―一二九一）から第一四世の天柱宗昊（？―一三三二）に至る一三人の禅者の塔頭を中心とする門派が形成されたことが知られる。この中で邵元は第一一番目の桂昌庵を拠点とする桂昌門派に属しているわけである。聖一派にはほかにも大同派・天得派・正法派などが存している。

(2) 東京大学史料編纂所に所蔵される『名僧行録』は全五冊より成っており、明治二二年（一八八九）一月に書写されているが、その原本は塙忠韶氏の所蔵であったとされる。ただ、もとの原本である塙本が如何なる経由で伝承され、また塙氏の蔵書となったのかは定かでない。多くの中世の臨済・曹洞両宗の禅者の伝記史料を大まかな系統別に収録しているが、第五の伝記史料の最後には慶安三年（一六五〇）五月に南禅寺の最嶽元良（？―一六五七）が撰した「前住大徳沢庵禅師塔銘」を収めており、それ以降のものが存しないことから、原本の成立はおよそ江戸初期と見てよいであろう。それらの伝記史料の中には他に伝存しない貴重なものも見い出せる。

(3) 『東福寺誌』は白石虎月（芳瑠）の編纂になり、昭和五年（一九三〇）四月一七日に発行されている。東福寺の開基である九条道家（光明峰寺殿、一一九三―一二五二）が生まれた建久四年（一一九三）より江戸中末期の享和二年（一八〇二）までの史料を編年体でまとめており、さらに附録として「東福寺年表」「慧日山東福禅寺住持歴代」「京城山万寿寺住持歴代」「京兆凌霄山普門寺歴代」「万松山承天禅寺歴代」「長楽寺歴代」「東福末寺異動表」などを載せている。

(4) 『国書総目録』巻四には、ほかにもつぎのような記事が存している。

古元和尚録〈こげんおしょうろく〉一冊（類）禅宗（成）
元禄一一刊（版）茶図成簀

この古元和尚が具体的に誰を指しているのかは定かでないが、元禄一一年（一六九八）に刊行された『古元和尚録』一冊の版本が御茶ノ水図書館の成簀堂文庫に所蔵されていることが知られる。

(5) 『国朝書目』は日本古典全集刊行会編『日本古典全集』の「書目集上」に収録されているものを使用した。

(6) 『扶桑禅林僧宝伝』巻五の「東福寺古源元禅師伝」は『大日本仏教全書』第七〇巻（一五二c～一五三a）に、『延宝伝燈録』巻一二の「京兆東福古源邵元禅師」の章は『大日本仏教全書』第六九巻（二一三b～二一四b）に、また『本朝高僧伝』巻三〇の「京兆南禅寺沙門邵元伝」は『大日本仏教全書』第六三巻（一八四b～一八四c）にそれぞれ載せられている。

(7) 『本朝僧宝伝』巻上の「桂昌〈双峯宗源〉派」の「古源邵元」の箇所は『大日本仏教全書』第六九巻（一一二a）に存しており、その全文は、

古源、諱邵〈邵、河南府路登封県嵩山祖庭大少林禅寺第十五代住持息庵禅師行実作レ召〉元。越前人。嗣二法双峯一。往二東福一為二第廿五世一。貞治三年甲辰十一月十一日〈十一日、一作二十日一〉化。偈曰、末後一句、始到二牢関一、撃二破鉄壁一、踢二倒銀山一、阿呵々。塔号二南泉一、庵号二物外一。

である。また『扶桑五山記』五「山城州慧日山東福禅寺」の「住持位次」には、

廿五、諱邵元。嗣二双峰一。塔二于南泉菴一。頌曰、末後一句、

始到二牢関一、撃二砕鉄壁一、踏二倒銀山一。

という簡略な記載が存している。

（8）玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（講談社刊、昭和五八年）の「古源邵元」の項（一九三～一九五頁）による。

（9）禅僧の道号と法諱の関係については、玉村竹二「禅僧称号考」（『日本禅宗史論集』上に所収）を参照。ちなみに邵元より一世代早いものの、ほぼ史じ鎌倉末期に古源覚淵という松源派の大休正念（仏源禅師、一二一五―一二八九）の法を嗣いだ禅者の名が知られている。この人ははじめ法諱を守初と称したが、後に覚淵と改めており、『大休和尚語録』「偈頌雑題」には、

古源幷序

子住二禅興一日、与レ之安二名守初一。故有二学道如成道有余之語一。逮下子由二巨福一至中寿山上、相従居二蔵司一掌二記室一。一日、復求レ改二名覚淵一。然有レ始必有レ終、有レ源必有レ流、仍字レ之曰二古源一。庶名以称レ実云レ爾。

払石劫前正脈通、浩然無間勢呑レ空、茫茫競逐狂瀾者、孰解迎流到二水窮一。

という覚淵に与えた道号頌とその序が収められている。この人の場合、道号の古源と法諱の下字の淵が関連しているわけである。

（10）『大方広円覚修多羅了義経』に「汝等乃能諸菩薩及末世衆生、修二習菩薩如幻三昧方便一」（大正一七・八四二a）とあり、また菩提達磨の『二入四行論』にも「諸法無行経云、知二諸法如幻一、速成二人中上一」とある。

（11）『景徳伝燈録』巻八「池州南泉普願禅師」の章に、

趙州問、道非二物外一、物外非レ道、如何是物外道。師便打。趙州捉二住棒一云、已後莫二錯打一人去一。師云、龍蛇易レ弁、納子難レ謾。

とあり、また『宗門聯燈会要』巻四「池州南泉普願禅師」の章にも、

示レ衆云、道非二物外一、物外非レ道。趙州出問、如何是物外道。師便打。州捉住云、和尚莫レ打二某甲一、已後錯打レ人去在。師擲二下棒一云、龍蛇易レ弁、納子難レ瞞。

とあって、唐代の南泉普願（王老師、七四八―八三四）が物外の宗旨を挙揚したことが窺われ、これが後に邵元が自らの庵を南泉庵、軒を物外軒と称する因由となっている。ちなみに『本朝高僧伝』巻二五「相州浄妙寺沙門慧広伝」によれば、当時としては仏光派の天岸慧広（仏乗禅師、一二七三―一三三五）も元から帰国して後、物外庵という庵に寓居している。

（12）髫はうない・たれがみのことで、小児の襟首に垂れる髪のことをいう。転じて、垂れ髪をした稚い年頃、七歳か八歳くらいの幼い子供の意となる。髫齔や垂髫なども同じく童子・小児のことである。おそらく邵元は幼くして出家を志し、郷里越前の禅寺か教寺に身を投じて童行（童子行者）となったのであろう。『禅苑清規』巻九「訓童行」によれば「童行初来投レ院、師主審問二根源一。若具二正因一、方可二容納一」とあるから、邵元も幼き日に同じように村院に投じて師より仏道に対する正因を試されたのであろう。なお、邵元の七、八歳は正安三年（一三〇一）から同四年の頃に当たっている。

（13）東明慧日については、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』の「東明慧日」の項や、同『五山文学新集』別巻二の「東明和尚語録」の解題などを参照

（14）『東明和尚語録』については、石川力山「『白雲東明和尚語録』考」（『曹洞宗研究員研究紀要』第七号）に詳しい考証

が存している。

(15) 『夢窓国師会下秉払法語』一冊は、内題を『霊亀山天龍資聖禅寺秉払』といい、建仁寺両足院の所蔵で、東京大学史料編纂所に複写本が存している。

(18) 別源円旨については、「日本故建仁別源和尚塔銘並序」などによって一般に越前の平氏の出身とされているが、玉村竹二氏は『五山禅僧伝記集成』の「別源円旨」の項などにおいて、源氏系の越前合志氏の出身であろうとしている。

(17) 石井光雄氏の積翠軒文庫旧蔵本の『関東諸老遺藁』は、現在その所在を失っているが、幸いに玉村竹二氏によって『五山文学新集』別巻二に所収されてその全文が知られている。また玉村竹二「『関東諸老遺藁』考」(『日本禅宗史論集』下之一に所収)の論考も存している。

(18) 一山派の無惑良欽は、一山一寧の法嗣であり、一寧の示寂後、鎌倉の建長寺や円覚寺で参学しており、この間に邵元とも道交を深めたものらしい。信濃(長野県)の慈雲寺や鎌倉の乾明山万寿寺に住し、延文四年(一三五九)に上洛して南禅寺大雲庵の塔主を司っているから、このときに三〇余年ぶりに邵元と再会しているものであろう。玉村竹二『五山禅僧伝記集成』の「無惑良欽」の項を参照。

(19) 『東福寺誌』「文保元年(一三一七)」の項(二三五頁)には、「霊山和尚業識図〈写本〉」として、

借二前韻一寄二彰勝古源和尚一

半生遁跡罷二南洵一、修字無レ郵見二故人一、包笠同携壮日侶、書窓共読幼時隣、大虚廓徹翔二金鳳一、滄海澄渟戲二玉麟一、我今年六十二、座隅胥会恐レ無レ因。

という業識図の偈頌を載せ、これに「霊山道隠、詩を東福古源邵元に寄す」と注記している。霊山和尚とは破庵派の雪巌祖欽(?―一二八七)の法嗣として元応元年(一三一九)に来日した霊山道隠(仏慧禅師、一二五五―一三二五)のことであり、その六二歳とは実に正和五年(一三一六)に当たっている。したがって、ここにいう彰勝の古源和尚とは、年時的にいって道隠がいまだ在元中に関わっていた禅者ということになり、ここにいう邵元とは別人と見てよかろう。なお、道隠は杭州(浙江省)の人で、彼の高峰原妙(一二三八―一二九五)とは同門でその法弟に当たっており、来日後は北条高時(相模太郎、一三〇三―一三三三)に遇せられて鎌倉の建長寺第一九世や円覚寺第一二世になっているから、ほぼ前後して両寺に住持している東明慧日や南山士雲とはかなりの交流が存したものと見られ、慧日や士雲に学んでいる邵元が道隠とも関わりを持った可能性は高い。

(20) 『乾峰和尚語録』巻一「三住恵日語録」に「東明和尚訃至上堂」を載せ、その中で「専使曙蔵主進曰」として、円曙との問答が記されている。

(21) 南山士雲については、一般の燈史・僧伝として『延宝伝燈録』巻一八「京兆東福南山士雲禅師」の章、『本朝高僧伝』巻二五「京兆東福寺沙門士雲伝」および『扶桑禅林僧宝伝』巻三「東福寺南山雲禅師伝」が存している。

(22) 「東福第十一世南山和尚行実」は永享四年(一四三二)一〇月に士雲の遠孫に当たる竹庵大縁(一三六二―一四三九)によって撰せられており、『続群書類従』第九輯下に載せられている。また『南山和尚語録』巻末に所収されるものは「南山和尚行状」とあるが、表題が違うのみでほぼ同文といってよい。

(23) 『南山和尚語録』一巻は内閣文庫や松ヶ岡文庫および鎌倉市二階堂の錦屏山瑞泉寺などに写本として所蔵されている。

ただ、昭和四五年（一九七〇）七月に東福寺荘厳蔵院より開山遠諱記念として新たに復刻影印されているので閲覧に便がよい。観応三年（一三五二）九月に法嗣の乾峰士曇（一二八五―一三六一）が撰した序文につづき、上堂に「初住博多承天禅寺語録」「住濃州二木法蔵禅寺語録」「住相州青龍山東勝禅寺語録」「住城州恵日名山東福禅寺語録」「住相陽亀谷山寿福禅寺語録」「住相陽瑞鹿山円覚禅寺語録」「住相州巨福山建長禅寺語録」「住相陽金剛山崇寿禅寺語録」を収め、さらに「小参」「小仏事」「仏祖賛」「銘」および士曇の流れに属する竹庵大縁が撰した「南山和尚行状」を収めている。

(24)　『続群書類従』第九輯下に所収される「広智国師乾峰和尚行状」（『乾峯和尚語録』巻五「附録」の「乾峯和尚行状」は字句に若干の異同が見られる）によれば、

永仁戊戌、南山雲公住二承天一。師年十四、求二于謁一。無二先容者一、山竊見奇レ之。（中略）乾元壬寅、山赴レ洛、二年山住二相陽一、師侍行。（中略）応長辛亥秋、南山住二東福一、師年廿七在レ傍、謂曰、我四十年前参二一国師一、挙二四賓主話一、胸襟豁如、爾来参二諸方知識一、道無二異味一。師曰、若二四賓主一則不レ須レ参。山曰、汝作麼生会。師曰、賓主歴然。山曰、以レ何為レ験。師曰、漏逗不レ少。

とあり、士曇は永仁六年（一二九八）に士雲が筑前の承天寺に住したときから久しく随侍していたことが知られ、応長元年（一三一一）に東福寺において士雲との間で交わした「臨済四賓主」にちなむ問答商量を伝えている。

(25)　『続群書類従』第九輯下「智覚庵開山大道和尚行状」に、

謁二規庵於南禅一求二掛搭一。規庵出レ頌而試、以也次韻而閲。規庵遷化、一山住持、以也霑二二老甘露一也。然後謁二南山於東福一、呈レ頌求二単位一、笑而許也。

とあり、また『大道和尚語録』附録の「前住南禅大道以禅師伝」にも、

去参二約翁倹于建長、規菴円・一山寧于南禅一。依二南山・双峯于東福一、双峯中二南禅之選一、師参随司二書状知客等職一。虎関出二世東福一、招充二後版一。

とあって、大道一以がほとんど邵元と同じ時期に東福寺において南山士雲さらに双峰宗源に学んでいることが知られる。

(26)　『友山録』（『五山文学新集』第二巻に所収）巻上の巻首に載る「東福友山和尚行状」（『続群書類従』第九輯下では「友山和尚伝」）には、

師諱士偲、字友山。初名士思、号友雲、故元国諸師墨帖、皆称二思友雲一。洛西山崎人、族藤氏。誕二於伏見天皇正安三年辛丑一。始父母有二二子一、長早世、次師也。幼而穎異、有二出塵之志一。父携謁二雲南山於恵日一。学二出世法一、尋而薙髪受具。父母相謀曰、才有二二子一、皈二之釈種一、吾之於レ世、幸无レ所レ拘、不レ如二遠践老龐之風烈一。父自称二庵主一、母亦脱二簪珥一。

とあり、友山士偲についても、父母が一子士偲を幼くして東福寺の士雲の席下に預けたことを伝えている。また「東福友山和尚行状」には「文保元年丁巳、山移二相之円覚一、師従レ焉掌二侍職一」とあり、士偲が士雲に随侍して文保元年に鎌倉の円覚寺に移り、侍者の職を掌ったことが知られる。

(27)　『東明和尚語録』では住山録の編纂が編年的に不明確なので、上堂語録の配列によってその住山期間を推定することができない。

(28)　「仏観禅師行状」によれば、

年十七、偶一日遊山、到二一草庵一、見二僧宴坐一、即投礼問レ法。僧見二師気宇不レ凡、示レ諭曰、仏教門利済雖レ無レ辺、

速断二生死一、不レ過二吾箇宗門一耳。師聞二此言一、手剪レ髪、伏将レ求二得度一。僧以レ不レ知二来由一、故卒不レ応レ所レ請。即潜往二洛東福一、易レ服受具、拝二円覚南山和尚一為二授戒師一、便入レ衆参堂。師音声和雅、容儀儼若也。臨レ夏首二堂司一、特請充二楞厳頭一。由レ是海内禅叢無レ不レ称二師名一。一旦長嗟曰、稠人広衆中規矩繁多、而難不レ得二一片為道一。即取二金剛経一、誓書二其背一曰、此生若不レ決二生死大事一、再不三肯出二人間一。即抽レ単遊方、知識之門無レ不二歴扣一。晩依二附夢窓国師一、二十余歳不レ離二左右一。

と記されており、慈永が文保二年（一三一八）に一七歳にして東福寺に赴き、鎌倉円覚寺にて士雲を拝して受戒していることが知られる。このとき士雲は士永という法諱を付与しており、後に夢窓派に転じた慈永は疎石より与えられた慈永という法諱に改名している。

(29) 双峰宗源については、一般の燈史・僧伝として『延宝伝燈録』巻一八「京兆南禅双峯宗源禅師」の章、『本朝高僧伝』巻二二「京兆南禅寺沙門宗源伝」および『扶桑禅林僧宝伝』巻三「南禅寺双峯国師伝」が存している。

(30) 士雲と宗源はきわめて親密な道交をなしており、『南山和尚語録』「住城州恵日名山東福禅寺語録」には「崇福双峯和尚到上堂」を収めるほか、「南山和尚行状」によれば、

（永仁）五年、四十四、有二承天之請一来二洛下一。仏源・大通・一山・鏡堂・仏燈・双峯・玉山・鉄菴・絶涯諸老、偈以賀レ之。

という記事を伝えている。また『双峰国師語録』「小仏事」には「南山和尚秉炬」が収められている。

(31) 『双峰国師語録』や『続群書類従』第九輯下に所収される「双峰国師年譜略」には、

元応元年己未〈五十七歳〉入二相陽一、平副帥高時、驩而相迎、聞二師之香積不レ賑、割二防州上得地一莊一、捨二於東福一。

と記されており、元応元年（一三一九）に鎌倉に赴いた宗源に対して執権の北条高時が東福寺の香積（庫院）のために周防（山口県）の荘園を喜捨したとされる。

(32) 「不聞和尚行状」の撰者が誰なのかは定かでないが、『続群書類従』第九輯下および『曹洞宗全書』「史伝下」などに収録されている。

(33) 「智覚庵開山大道和尚行状」によれば、

南山勇退、双峯瑞世、以也司二請客於恵日一。双峯中二南禅之選一、以也参随司二書状及知客維那蔵主於瑞龍一。虎関出二世於東福一、以也司二後板一。

とあるから、一以がほぼ邵元と同じ時期に南山士雲の席下から双峰宗源の席下に転じていることが知られる。おそらく邵元はこの頃から一以と親しく道交を結んでいたのであろう。

(34) 『双峰国師語録』一巻は内閣文庫・大谷大学・松ヶ岡文庫・東福寺大機院などにそれぞれ写本として所蔵されている。内閣文庫本は同門の潜渓処謙（普円国師、？―一三三〇）の『普円国師語録』一巻と合冊され、松ヶ岡文庫本や大機院本は同門の耕叟仙原の『耕叟原和尚遺稿』や虎関師錬の遠孫に当たる允芳慧菊の『雲安集』と合冊されている。内閣文庫本によれば、『双峰国師語録』ははじめに東福寺での上堂語録が収められ、ついで「小仏事」「偈頌」「仏祖賛」「自賛」「遺偈」がまとめられている。さらに巻末には「双峰国師年譜略」「祭文」その他が存した後に、「真賛」として阿育王山の月江正印（仏心禅師、一二六七―？）と大道一以の作が収められ、最後に邵元の二首の作が載せられている。

(35) また播磨の中世地誌である『峰相記』には、

又当国ニ禅院ノ始ル事ハ、永仁ノ末ノ比、東福寺門徒潜渓国師、平野ニ法覚寺ヲ建立ス、是始也。延慶ノ比、禅首座、浦上ノ福立寺ヲ禅院ニ成シテ、成覚上座ニ譲補ス。正和ノ比、仙覚上座、上岡山崎ニ金剛寺ヲ立。元亨二年、東福寺龍吟菴門徒玄広上座、大市ノ観音寺ヲ禅院ニ成シテ、正中元年七月五日入滅ス。桂昌菴門徒隆首座、其跡ヲ継テ一寺ヲ興行ス。同キ比、同キ法々眷深首座、坂越ノ庄ニ常楽寺ヲ立。正和ノ比、良円鑒寺、上揖保ニ福光寺ヲ立。永明菴門徒明欽上座、桑原ニ慶福寺ヲ立。覚恩上座、下揖保ニ安養寺ヲ立。果満上座、同所ニ弘宗寺ヲ立。源明上座、那波嶋ニ寺ヲ立。松井ノ庄ノ瑞光寺、福地ノ東条寺、同比也。此外、所々ニ二三人ノ寺、当時独住所ニテ四十余所有ル由、聞ヘ候。法雲寺ハ金花山トテ、暦応年中、友梅西堂開山ニテ、諸山ノ内ニテ御願所也。供養ノ時、檀那下洛シ、一国馳集リ、諸国群ヲ成、万人耳目ヲ驚畢。

という記事が見られ、その中にやはり播磨赤穂郡坂越庄に常楽寺が建立された事実を伝えている。これによれば、播磨に禅院が建てられたのは東福寺の潜渓処謙（普円国師、？―一三三〇）が平野（いま姫路市平野）に宝光寺（法覚寺とするのは誤り）を開創したことに始まる。その後、東福寺派の諸禅者が相継いで禅院を建立しており、双峰宗源の桂昌庵門徒でも、隆首座が無関普門（玄悟・大明国師、一二一二―一二九一）の系統に属する龍吟庵門徒の玄広上座（？―一三二四）の後を継いで大市（いま姫路市西脇）の観音寺を興行し、元亨二年（一三二二）の頃に法眷の深首座が坂越庄（いま赤穂市坂越）に常楽寺を立て、また正和年間（一三一二―一三一七）に良円鑑寺が上揖保（いま龍野市揖保町）に福光寺を立てたことが知られる。常楽寺に関しては源首座であれば邵元の可能性があるものの、深首座であれば同門の洞天源深（？―一三六四）を指すことになろう。ちなみに『東福寺誌』「正平十九年・貞治三年」の項には、

四月廿六日、東福三十三世洞天源深寂。師筑州之人、嗣二双峯一。為二石州良昌・播州坂越常楽之祖一。塔二正宗庵一。

と記されていることから、常楽寺を源深の開創ととらえていることが知られる。ともあれ今日、播磨すなわち兵庫県西部の地には東福寺派の寺院が存しておらず、結局、この地に聖一派の禅が定着することはなかったのであろう。

(36)　『双峰国師語録』「自賛」には「邵元首座請」につづいて「源用侍者請」「源深侍者請」「禅人請二首」「臨行自賛」を収めている。侍者であった大方源用（一三一四―一三九〇）や洞天源深も宗源に頂相の賛語を求めているわけである。

(37)　邵元と同じ嘉暦二年（一三二七）に入元した禅者の名は伝えられていないことから、おそらく邵元は単独に入元渡航を図ったものと見られる。邵元の前後に入元した禅者として、「不聞和尚行状」によれば、宏智派の不聞契聞が前年の嘉暦元年に入元しており、また「東福友山和尚行状」によれば、翌年の嘉暦三年には聖一派の正堂士顕と友山士偲の法兄弟が入元している。

(38)　『双峰国師語録』には「南山和尚秉炬」を収めており、「南山和尚行状」にも、

建武二年乙亥、後醍醐重祚二年也。師八十二、自題、寺門前長松樹、一株枯一株栄、老僧示二涅槃相一、諸子莫レ動二哀情一。十月七日書レ偈曰、了二達三世一、撥二転一機一、祖也不レ会、仏也不レ知。火浴五色舎利粲然、焰焰所レ及、不レ可二勝数一。双峯秉炬曰、（下略）。

とあって、士雲の示寂前後の状況と宗源の士雲に対する秉炬

のことばを載せている。また「双峰国師年譜略」には宗源の示寂について、

二年乙亥〈七十三歳〉十一月示二微疾一。二十一日中夜、歛レ儀趺坐、召二門弟子一、後事一々条尽レ之、各加二勉諭一。時檀越吏部親王、以二師頂相一請レ讃。迅筆為レ書曰、泥洹一句、無二人咨参一、雲収二碧嶂一、月落二寒潭一。又書レ偈曰、幻生幻滅、畢竟非レ実、本地風光、無レ固無レ必。放レ筆而化二於恵日之正寝一。実二十二日寅刻也。二十三日、奉二全身一帰二桂昌庵一闍維、収二骨石一築二塔於菴之東南隅一。滅後六年、暦応三年十一月二十日、勅二諡双峰国師一。

とあり、宗源が土雲の示寂後わずか一ヶ月半にして後を追うかのごとく遷化した消息が知られる。土雲や宗源が示寂した当時、邵元はいまだ在元中であったことから、後に元国から帰国してはじめて両者の遷化の詳細を知ったことになろう。

(39) 雪村友梅の下獄事件については、今谷明『元朝・中国渡航記—留学僧・雪村友梅の数奇な運命—』(宝島社刊)に詳しい。

(40) 破庵派の樵隠悟逸については、『増集続伝燈録』巻五「福州雪峰樵隠悟逸禅師」の章では「浄慈愚極慧禅師法嗣」として挙げており、「絶岸湘手度弟子」とあるから、もともとは無準下の絶岸可湘(一二〇六—一二九〇)の下で得度していることが知られる。また『継燈録』巻六「雪峰樵隠悟逸禅師」の章では「未詳法嗣」としながらも「得二法于雪峰仏海禅師一」とし、さらに雪峰山での活動を記して後、「元統二年示寂、塔二于仏海塔傍一」と伝えているが、その世寿や法臘などは記していない。なお、『雪峯志』巻八「紀芸文」には延祐四年(一三一七)一〇月一八日に悟逸が撰した「樵隠塔銘」が載せられており、幻の立場が強調されている。

(41) 『雪峯志』巻五「紀当山」には、

第五十三代悟逸、樵隠禅師、懐安聶氏子。大徳十年当山、凡七載、架二造祖殿・法堂・僧堂一。退二居西菴一。皇慶三年、特旨復命当山、造二大殿仏像一。延祐四年、造二如帰堂一。六年復退二居西菴一。泰定二年、再承レ旨当山。又七載、元統二年示寂、塔二于海会塔之西一。

とあり、悟逸が三度にわたって雪峰山に住し、多くの堂塔伽藍を再建したことを伝えている。これによれば、邵元が雪峰山に到ったのは、悟逸が雪峰山に三住した泰定二年(一三二五)から元統二年(一三三四)までの期間に相当しよう。

(42) 『続群書類従』第九輯下の「清拙大鑑禅師塔銘」では、清拙正澄の来日について、

海東檀信遣レ使至、師欲レ流二通仏心之道一、忻然受レ請、登レ舟而東、嗣子永鎮侍レ焉。大元泰定丙寅六月、間二游耽羅・高麗・新羅等国一、有二題詠一載二別録一。八月至二博多一、明年正月上レ京。関東使来迎居二建長一、三月十二日入レ寺。

とあるから、正澄は日本の嘉暦元年(一三二六)八月に博多に到着し、さらに明年一月に上洛し、三月一二日に鎌倉の建長寺に入寺していることが知られる。大澄の来日した翌年に入元している邵元が仮に何れかで正澄に会い得たとすれば、正澄より同門に当たる悟逸への紹介状を得ていたのかも知れない。

(43) 樵隠悟逸に参学した日本僧については、玉村竹二「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」(『日本禅宗史論集』下之二に所収)などによって知られる。一峰通玄が悟逸に参じた消息は通玄の詩文集である『一峰知蔵海滴集』に載る。友山士偲が悟逸に参じたことは「東福友山和尚行状」にちなみ、『友山録』巻下および『禅林墨蹟』(八五)には元統三年

（至元元年、一三三五）一一月浄慈寺の悟逸が七四歳で士偲のために書した偈頌を伝えている。また無夢一清が雪峰山の悟逸に参じて至順三年（一三三二）八月一九日に「無夢偈号」の道号頌を受けたことは『続禅林墨蹟』（二六三）による。さらに古鏡明千の参学は『延宝伝燈録』巻二七「京兆万寿古鏡明千禅師」の章による。ただ、仏源派の礼智については『鈍鉄集』の序に載るのみで道号はもちろん、その後の消息なども定かでない。

(44) 『鈍鉄集』巻末に載る悟逸の跋文には、

至順四年癸酉事五、住南門第一雪峰仏智禅師樵隠悟逸、時年七十有二書。

とあり、このとき悟逸が仏智禅師の勅賜号を受けていたことや至順四年（一三三三）に七二歳であったことが判明する。

(45) 「雪峰輥毬」の古則というのは、『五燈会元』巻七「福州雪峰義存禅師」の章に、

上堂、尽大地是箇解脱門、把手拽伊不肯入。一僧出曰、和尚怪某甲不得。又一僧曰、用入作甚麼。師便打。玄沙謂師曰、某甲如今大用去、和尚作麼生。師将三箇木毬、一時抛出。沙作斫牌勢。師曰、你親在霊山、方得如此。沙曰、也是自家事。

とある雪峰義存とその法嗣の玄沙師備（宗一大師、八三五―九〇八）の問答である。義存が放出した三箇の木毬とは三解脱門を指しており、義存と師備の両者は尽大地が解脱門である道理を互いに語り合っている。同じように悟逸と邵元も三解脱門と木毬を課題に問答商量を展開しているわけである。

(46) 「百丈三日耳聾」の古則については、『宗門聯燈会要』巻四「洪州百丈懐海禅師」の章に、

師再参馬大師、侍立次、大師目顧繩床角払子。師云、即此用離此用。祖云、汝向後開両片皮、将何為人。師取払子竪起。祖云、即此用離此用。師挂払子旧処。祖震威一喝。師直得三日耳聾。

とある。唐代に馬祖道一（大寂禅師、七〇九―七八八）に再参した百丈懐海（大智禅師、七四九―八一四）が道一の一喝によって三日間、耳が聞こえなくなった因縁である。一般には『碧巌録』第一一則「黄檗噇酒糟漢」の評唱によって知られる。

(47) 『雁山志』四巻は明代に朱諫（字は君佐、一四六二―一五四一）が撰したものが『中国仏寺志』第二輯の第一〇冊に収録されている。

(48) 『無見和尚語録』（内題は『妙明真覚無見覩和尚住華頂善興禅寺語録』）二巻については、清の順治一四年（一六五七）に重梓されたものが明続蔵六三ノ一に所収され、また日本の延宝二年（一六七四）に黄檗宗の月潭道澄（道澄とも、一六三六―一七一三）の跋文を付したものが卍続蔵経に所収されている。内容は序文に次いで巻上に「示衆」「小参」「法語」「頌古」「真賛」を、巻下に「偈頌」「山居詩」「題跋」「臨終遺誡」「辞世偈」を収め、巻末に大慧派の夢堂曇噩（仏真丈懿禅師、一二八五―一三七三）が撰した「無見覩和尚塔銘并序」と跋文二首を載せ、延宝本にはさらに道澄の跋文を載せている。

(49) 天台山の景徳国清禅寺の曇噩が撰した「無見覩和尚塔銘并序」には、

禅師即事偏参、見蔵室珍公於天封・方山宝公於瑞岩西菴、而往来二公間。雖有所契、未臻其極。遂築室華頂、精苦自励。一日作務次、渙然発省、平生凝滞、当下氷釈。乃走西菴、呈所解。山以偈印之。辞還峰頂、山

不レ能レ留也。且華頂之勝、自二智者顗・大寂韶・高菴悟諸鉅公一、以二徽名懿徳一賁二泉石一。而天子之尊、王公将相之貴、必詔問二法要一。躬礼慈容、日馳二輦騁一。駅致二香幣一、使者冠蓋蒡午。然其地高寒幽僻、人莫レ能二久処一。惟禅師一坐四十年、足未二嘗輒一閲戸限一。其拈提開示勘辨之辞、頌偈簡牘之筆、誠般若之余膏、涅槃之賸馥也。

とあって、先覩が如何に華頂峰での宴坐を好み、孤高な宗風を振ったかが偲ばれる。松源派の恕中無慍（空室、一三〇九―一三八六）が撰述した『山菴雑録』巻上「無見禅師」の項にも、

無見禅師、仙居葉氏子。世業レ儒以二俊才一。掌二天寧古田内記一、参二方山禅師於瑞岩一、尽得二其要領一。翻然拉二可蔵主者一、同至二華頂一、尋二宋高菴所レ居故址一、結レ茅而居。於レ是道化大行、学者雲集。道俗以二為レ無レ田不レ可レ蓄レ衆、往往持二田券一来施。師皆却レ之。冬夏一衲、食惟充レ饑、不レ分二麁細一。

と記されており、先覩の茅屋における質素枯淡なありようを伝えている。また『増集続伝燈録』巻六「天台華頂無見覩禅師」の章にも、

乃翩然上二華頂一、尋二高庵所レ居故址一結レ茅而居、久之道化大行、咸謂二高庵再来一也。

とあり、先覩が高庵善悟の故址に結庵し、その再来と称せられたことを伝えている。

(50) 天台山中の華頂善興禅寺については、『嘉定赤城志』巻二八「寺観門〈寺院〉」の「天台〈甲乙院〉」の箇所に、

善興院、在二県東北六十里一。旧名二華頂円覚道場一。晋天福元年、僧徳韶建。蓋僧智顗、嘗宴二坐於此一、故有二定光招手石一。古語云、定光金地遥招レ手、智者江陵暗点頭、是也。

又有二降魔塔・伏虎壇・鬼畳石・白雲先生室・甘泉先生居一。今者旧又伝二葛元茶圃・王羲之墨池一。然無レ所レ拠。国朝治平三年、改二今額一。

とあり、古く天台宗祖の天台智顗（智者大師、五三八―五九七）が宴坐した地とされ、後晋の天福元年（九三六）に法眼宗の天台徳韶（八九一―九七二）が華頂円覚道場を開創したことに始まっている。北宋の治平三年（一〇六六）に善興寺と改められたとされるが、甲乙院として扱われているから、宋代には明確な禅寺ではなかったことになり、その後、先覩が住した元代には禅寺に列せられているわけである。また寺内には多くの名所旧跡が存していたことから、邵元もこれらの史蹟を目の当たりにしていたものと見られる。この華頂寺は現今においても、国清寺や万年寺などとともに天台山中の有力寺院の一つとして機能存続している。

(51) 先覩に参学した日本僧については、前出「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」を参照。邵元と同じ聖一派の禅者として、正堂士顕の参学については『延宝伝燈録』巻一二「予州好成山善応寺正堂士顕禅師」の章に、無夢一清の参学については『延宝伝燈録』巻一二「京兆東福無夢一清禅師」の章に、友山士偲の参学については「東福友山和尚行状」にそれぞれ載る。また他の臨済宗諸派の禅者として、古先印元の参学については「古先和尚行状」に、寂室元光の参学については「寂室和尚行状」や「江州永源寺開山円応禅師行状」に、可翁宗然の参学については『延宝伝燈録』巻二〇「京兆南禅可翁宗然禅師」の章にそれぞれ載る。さらに曹洞宗の禅者として、大智の参学については『延宝伝燈録』巻七「加州鳳凰山祇陀寺祖継大智禅師」の章などに、別源円旨の参学については「日本故建仁別源和尚塔銘並序」に、不聞契聞の参

学については「不聞和尚行状」にそれぞれ載る。しかしながら、当の先覩の『無見和尚語録』ではわずかに「偈頌」に「示二日本揀禅人一」を載せるにすぎない。

(52) 天台の石橋すなわち石梁瀑布については、『嘉定赤城志』巻二一「山水門」の「天台」の箇所に、

石橋、在二県北五十里一。即五百応真之境、相伝為二方広寺有二石梁一。架両厓間、龍形亀背、広不レ盈レ咫。其上双澗合流、洩為二瀑布一、西流出二剡中一。梁既峭危、且多二苺苔一甚滑、下臨二絶澗一、過者目眩心悸。昔僧曇猷、欲レ渡レ梁訪二方広一、忽有二石屏一梗レ之。旧号二蒸餅峯一。孫綽賦所謂、践二苺苔之滑石一、搏二壁立之翠屏一、是也。凡往来人、供二茗乳花一効応、或宝炬金雀、霊蹤梵響、接二於見聞一。石罅有二木瓜一尤異花、時青蛇盤二糾枝榦一。至二実落一供二大士一乃去。人目為二護聖瓜一。

とあり、古くから五百羅漢の応現の地とされており、多くの日本僧も入宋・入元してこの地を拝登することを常としていたわけである。天台石橋の現今の状況については、駒沢大学中国仏教史蹟参観団編『中国仏蹟見聞記』第七集などを参照されたい。

(53) 断崖了義については、虞集の『道園学古録』巻四九や『西天目祖山志』巻八「銘」に「断崖和尚塔銘」が存しており、その中に、

後泰定三年、師勉詢二衆請一帰二坐祖庭一者一載、所謂正宗禅寺者也。参学之衆、輻湊而至。或示レ衆曰、（中略）元統元年歳除日、師忽謂二従者一曰、有二一件事一天来大、你還委悉麼。良久云、明日是年朝。正月六日、詣二法塔西一指二空地一曰、更好立二箇無縫塔一。其晩、与二禅者一談笑、至二夜分一乃曰、老僧明日天台去也。禅者曰、某甲随レ師去。師曰、你走馬也趁レ我不レ及。翌早跏趺而化。世寿七十二。僧臘四十有九。

と記されている。これによれば、了義の師子正宗寺での活動期間が泰定三年（一三二六）より示寂する元統二年（一三三四）一月までであったことが知られ、まさに邵元の在元期間の初期に相当している。

(54) 師子正宗寺については、『西天目祖山志』巻二「建置」に、

師子正宗禅寺、在二西目半山獅子巌左一。崖洞幽奇、松石霊怪。至元己卯間、高峯大師来二自龍鬚一、翦荊劚険以居。檀信洪喬祖、首輸二材力一、傑二搆禅叢一、断崖・中峯相継、宗風鼎盛。致二潘王忘レ躬参レ之、遠而仁宗加レ錫予レ之、蓄具見二碑伝一。延祐七年賜レ額。孟頫趙公撰レ記。元末燬二於兵一。明洪武四年、松隠禅師、復尋二旧址一手葺レ之。越九年、西域善世禅師、奉レ旨来游、名緇益集、至二二十四年一、立為二叢林一。（中略）今之開山殿即其故址。

とあり、元代の高峯原妙・中峯明本・断崖了義の三禅者のほか、さらに明代初期の松隠徳然（字は唯庵、？―一三八八）や西域から渡来した中インド僧の班的達（薩曷拶室利・善世禅師、？―一三八一）らの活動を伝えている。

(55) 『断崖禅師語録』については、『西天目祖山志』巻四「釈蔵」に、

雪巌禅師語録・高峯禅師語録・断崖禅師語録・中峯和尚広録（後略）。

とあり、同じく巻八「銘」の「断崖和尚塔銘」にも「師生縁悟繇、語録平実可レ考、乃按而序レ之」と記されている。他の雪巌祖欽・高峯原妙・中峯明本らの語録がそれぞれ現今に残されていることを考慮するなら、了義の語録もかつては広く読まれたものと見られる。

(56) 了義に参学した日本僧については、前出「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」を参照。孤峰覚明の参学については「孤峰和尚行実」に載り、寂室元光の参学については「寂室和尚行状」「江州永源寺開山円応禅師行状」に載り、また可翁宗然の参学については『延宝伝燈録』巻二〇「京兆南禅可翁宗然禅師」の章に載るが、いずれも邵元の入元以前に了義に学んでいるから、邵元が彼ら日本僧と時期的に同参であったわけではない。

(57) 千巌元長については、『千巌和尚語録』附録に宋濂の撰した「仏慧円明広照無辺普利大禅師塔銘」が存し、『増集続伝燈録』巻六「婺州伏龍山聖寿千巌元長禅師」の章や『南宋元明禅林僧宝伝』巻一一「伏龍千巌長禅師」の章なども比較的に詳しい。

(58) 『千巌和尚語録』二巻は参学比丘嗣詔が録したもので明又続蔵に所収されている。巻首に洪武九年（一三七六）八月に撰された宋濂の序文が載せられ、「上堂」「小参」「普説」「法語」「頌古」「偈頌」「讃跋」「仏事」に分けられている。「附録」として「仏慧円明広照無辺普利大禅師塔銘」を収め、さらに洪武七年の仏涅槃日（二月一五日）に大慧派の季潭宗泐（全室、一三一八―一三九一）が撰した「題千巌和尚語録後」と、万暦四六年（一六一八）の重刻の跋を載せている。

(59) 元長に参学した日本僧については、前出「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」を参照。大拙祖能の参学については東京大学史料編纂所所蔵の『前住建長大拙和尚年譜』に詳しく、無文元選の参学については「深奥山方広開基無文選禅師行業」に詳しい。また碧巌璨の参学については祖能・元選の両者の史料にともにその足跡が載せられており、やはり元長の法嗣とされている。ただし、邵元が元長に参じたのはこれら三禅者よりかなり早い時期に当たる。

(60) 『西天目祖山志』巻二「建置」によれば、

法雲塔。在二望江石一、距二重雲一里許。中峯和尚、幻憩二其中一。天暦乙巳、文宗賜二今額一、勅奎章学士虞集為レ銘。後丁二兵燬一、至二明興一重二建像一設崇奉焉。

とあり、明本の法雲塔が山中の西北側、千丈巌に存した開山原妙の重雲塔から程近い望江石に建てられたことが知られる。なお、虞集が撰して法雲塔に立石されたのが「勅賜智覚禅師法雲塔銘」（『道園学古録』巻四八では「智覚禅師塔銘」）であり、そこには、

大元至治癸亥八月十五日、化二於其山東岡之草庵一有二訣別一。書レ偈誡二門人一、勿レ行二世俗礼一。而門人及遠近来レ弔者、哭レ師甚哀声動二山谷一。遂奉二全身一葬以二西岡之上一、而塔レ焉。

と記されているから、明本が生前に宴坐した幻住庵は西天目山の東岡に存し、法雲塔は西岡に建てられたことが知られる。幻住庵については、『西天目祖山志』巻二「建置」に、

幻住庵。在二西方庵上一。中峯和尚宴坐草廬也。師自称二幻子一、凡所レ止処、名二幻住一。此其一也。

とあり、西天目山の東北側、西方庵の上の元通巌と聳壑峰に挟まれた地に存したことが知られる。

(61) 中峰塔（法雲塔）への日本僧の拝登としては、たとえば駒沢大学図書館所蔵『法雲雑記』（『大雄山法雲禅寺雑記』とも）の「法雲雑記便覧」に載る「常州路新治郡高岡県大雄山法雲禅寺第二世大光禅師復庵宗己大和尚」の伝記や同じく「法雲什物雑記」の「珂月・善栄二師覆書」によれば、幻住派の復庵宗己（大光禅師、一二八〇―一三五八）の門人である侍者の善慧が、師の宗己や法叔の明叟斉哲（？―一三四七）の命によって北朝の貞和二年（一三四六）に入元し、蘇

州（江蘇省）の幻住普応禅寺の玉庭珂月さらに西天目山法雲塔院の塔主善栄の席下に使いをなしている。このとき善慧は珂月や善栄より答書を得、また善栄より中峰明本の真賛頂相と伝来の法衣一頂を贈られて帰国しており、それらは常陸（茨城県）新治郡高岡県（いま新治村高岡）の大雄山法雲寺に所蔵されている。

(62) 『首楞厳義疏注経』巻七に「仏言、阿難当レ知、妙性円明離二諸名相一、本来無レ有二世界衆生一。一真之体、湛寂円明、非レ真非レ妄、名相都絶。生界斯泯、既衆生世界不レ立、仏及二出世一誰名。以二衆生妄分別一、有レ仏有二世界一。若了二真法性一、無レ仏無二世界一。斯則一真法界、本無二地位一也」（大正蔵三九・九二二b）と記されている。

(63) 「東福友山和尚行状」などによれば、友山士偲は嘉暦三年（一三二八）に法兄の正堂士顕とともに入元し、在元一八年にして貞和元年（一三四五）に此山妙在とともに帰国している。

(64) 此山妙在が入元した年時は定かでないが、その在元中の詩文集として『若木集』一巻が建仁寺に伝えられており、『五山文学全集』第二巻に収められて一般に知られている。『若木集』によれば、妙在は当時の日本僧としては珍しくも潭州（湖南省）瀏陽県の石霜山崇勝禅寺など湖南の禅林を中心に研鑽を深めたものらしく、とくに至元二年（一三三六）と至正元年（一三四一）には石霜山にて結夏に秉払して首座を勤めている。妙在の帰国は至正五年すなわち日本の貞和元年に当たっている。なお、妙在の石霜山での活動については、拙稿「石霜山の変遷とその現況」（駒沢大学中国仏教史蹟参観団編『中国仏蹟見聞記』第五集）を参照。当時、石霜山に到った日本僧としては、妙在のほかに宏智派の別源円旨と破庵派の無文元選の名が知られている。